連写
当流 新式
[illegible] 下

伊地知文庫
文庫20
233
3

産衣 第六　谷左衛門安英之

○安

▲淡路島（アハヂシマ）　非水辺ニ　非山類ニ　嶋　折
淡と書し　○異なに　国乃名に居所也
淡路島山ハ山類也　淡路潟ハ水辺也
▲淡路と　名二句　去嫌山類ニハ五句也
▲阿波なる　四国乃阿波也　水辺山類非
▲粟津原（アハヅガハラ）　非水辺ニ　○異なに　粟津
野は同原なる也と云説あるに要なし　水辺
よるべからず　淡乃とまぎるる　水辺ニ
非ざる類也　分別すべし　又淡の海近江ニ
泡津（アハツ）と云字を書なる　水辺ニ　又書あり
水辺也　是ハ書留嶽濱とも
▲粟まく　百穀ニ
○今日まき作乃社しかなる世のもとかく　べし　粟津潟と
又粟粒ともあり

伊地知氏書冊
林氏醫院
林氏醫院
文庫20 233 3

▲あはれ荷擔 [illegible]

▲哀（アハレ）一　憐（アハレム）一　以上二つ　哀と憐 [illegible]

▲あはれさ [illegible]

▲泡（アハ）　つし [illegible] 淡雪（アハユキ） [illegible]

泡沫　以上二つ

▲あがら庭 [illegible] 庭の字にて [illegible]

▲あがめられ [illegible]

[illegible]

▲あへど　二つし [illegible] ▲あへぬ [illegible]

[illegible]

○ [illegible]

▲跡（アト） [illegible]

[illegible]

▲ [illegible]

▲ [illegible]

▲あらむら [illegible]

[illegible]

○ [illegible]

▲あらむら [illegible]

[illegible]

▲あらさい [illegible]

[illegible]

○あらさい [illegible]

▲あらそひ [illegible]

▲有（アリ） [illegible]

▲有〻　あらまし二句去
▲有ニ　さもあらばあれ二句去　往還と云
▲有明　暁明と云　秋ニ一　又ニ春の名
一所ニ二句去し　月乃秋ニ春嫌と
▲有明ニ　有乃字二句　晨明く　明の字ニ
又句去し　明日(アス)付べからず　朝(アサ)乃字付く
可嫌　可嫌し　と朝(ケサ)可嫌　如此乃外むつかしき
▲有明ニ　月次乃月ハ文句嫌べし
○異本ニ二句嫌べしとも
▲有明く　斗下乃句ニ出る事嫌し
月ハ有明とかぎらし　打こゑて嫌ふべし
▲有明待る　秋月ニし　有明乃入ハ秋
らニ嫌ど　十四日より後の月の名なし
○異本ニ有明乃入方二日月乃出方也と
ハ秋らニ嫌どとも
▲有家(アリカ)　居所ニ二句　有ニ二句去と
文字ニも二句去之人乃上ニ有ニ嫌ふ
有りハ前居所ニ嫌ざるし

▲有磯海(アリソウミ)　越中国乃名所海なし　文ニ云荒(アラ)
磯海と云ハも有之又ハ海乃名所し
▲有様　有にも様にも二句嫌　情景又ハ事実と云
▲あれや〻　有の字文句なし
▲あらまし乃山ト八　述懐なし
▲あらじ一　人倫なし　月とあらじ嫌と
あらじハ人倫ニ嫌ど　あしハ花飛人倫ニ
▲あらじ一　有くあるし　あしハ花人倫ニ
▲あらじニ　有乃字二句嫌
▲あらじ　有くあらじまらけ又有ど
嫌やう文句斗り　有くハ嫌まじ嫌し
▲あらじまうけ　花ハ人倫ニ一泥嫌と云
▲青(アフキ)乃字　打越く嫌と云　物流
○異本ニ　青の字ニ雑物ニ嫌二之とも
緑(ミドリ)二句嫌　緑葉青柳なし　緑ハ二句の事し
▲青〻　雑し　神乃物と入くとど
▲青葉(アヲバ)　若(ハゲ)結くハ青し　鴨(カモ)乃名みと付べし
鴨ニ付べき目付し　○異本ニ青葉ハ

其れ末乃名なくよくハぶ留頃し　若
葉ふと其れよるしとまく
▲青葉の山　只青山乃ことし　名所ニ非
ざとゝ云　又小倉ふあるとも云　又丹後乃
名所ニもと云　又大分名所ニ有とし
▲青葉乃簾　四月朔日ニ夏の簾
▲あをすだれ　竹切し　庭のこ乃蘇乃
紙をうり色なし　二本ゆ乃遠し
▲青梅　夏し　不好詞し
▲青柳　春ふあらく　又春ニ柳あるに
▲青柳らふ　梅が香らふ　落葉し
実をおふる小梅花ニ面し　柳絮ハ
梅花ふ非らともれ季あして季ぞ梢
▲青柳乃糸らき山　只青柳乃ぶら
と云枕詞し　葛城山乃柳と云ニ非ど
○青柳乃葛城山の雨日に先も縁ふ柳ぶ糸ぶ
▲青楓　夏し
▲青き鰆　春し　青草を鰆く聖桜

乃らし三月三日乃らふ雛
▲青簾　さしても枕詞ニ非ど
▲青幣　白幣　丹木彦先云乃ねさし
▲青丹吉　青ゆも吉ゆも二面し　丹
いぐ　楢奈良と云枕詞し
▲青垣山　吉野乃ゆるし
▲白馬乃節会　正月七日乃秋大国
ふ白馬を引せあるし　八年始ふ白馬をとれハ邪気を払と云
樗く白馬乃ハ青ときる故
○松の気色ふ白馬を引が見ゆふ目出ん
○乃がり七日乃月乃さやけさと云白に
○白馬を佐渡ふ神乃つらがりて　家抵
又白馬をあをうまハ青乃色ニ象てく
▲縣　田舎　鄙
▲縣召除目　春し　正月十一日より十三日と行　此こ乃名高し　外官
除目し　百官ふく付るをかくいい
りく　位ふく付まじきし
○八隅知る君が旅乃縣召恵ミ給る名社ゆ

○乃かの春目ざしやうく留り
○篠石（アカメガシ）去年乃月を没めく　京柳
去年も名ある乃稼し明石

▲明石（アカシ）
乃義は名也ゝ岬ど　赤石と云

▲赤石ゝ石岩あり　赤沙州（サス）蔵
明乃字二句し　赤石と去猿し　○上矢かゝ岩ハ
文句続く　古二石の字て義活し

▲暁（アカツキ）　只一　暁（シノヽメ）一つゝ二つし　只暁ハ
義なし　時分中も　明分も二句
続し　暁と明の字ハ赤二　暁ハ明（アケ）ぼのに
分く　旅ニとれハこなく　従と
只義し

▲暁起（アカツキオキ）　只義し　但し　寝（イネ）白鶏二移る

▲あかね　色（イロ）薄し　深紅（ハリ）二　勇赤なる

▲あかゝね　さす二　色二句し　日乃光ん也
茜く　輝（カヤ）くあし　日し　続つ　枕詞し
○上蘆守　利日并星乃月　秋景甚乃明ふあれ　とゆん

▲あかさ海　てし　暗（アカニサ）乃字し　又鬼（アカニサ）太夫

▲あかね　前く　去て　以上二し

○矢なゝ二　あかねあかて　衣を云錦乃衣かを
又飽（アク）ゟ世を　あきて　衣を云　何二句し　衣ゟ
文句続く　継へしと　高明　絵定　とも

▲あかく　別（ワカ）へし　あかれハ別れゝ

▲揚（アガル）　アカ二　上（カミ）乃が背二句し

▲あかりさ代　上古乃留し

▲あかし稲（カレハ）　形景乃時を云く云也
足難し　名月朔日ニ　小野天神乃
流供をあかし稲と云　正月の也　萬（アシ）稲と云

▲閼伽（アカ）　続ふたくむ　花をるし　名元寛
続し　只義し　秋なし　名あ元月し
名ニ　二句し　○矢な二　名の梵語なら
有名を云字二　文句続し　名高也継国乃
部しと新式ふき　続ふ　あか川ことそて
八名高ニ二句也　又あか花名高附る移し　従来

▲閼伽（アカ）二　ち井　付べからず

▲あかり　只し　急く以上ニし　聖高也
山高所ぐ乃高也二句也し　かとりも二句

○夏ならバ　壁きゑ乃きゑ不通し　やまおろしハ二句通へしとき

▲あらし乃気　居所ニ折節も不嫌

▲あらし乃気あらく　萩原乃原などいふべからず

▲あてハニ　喉累二句し　あてハ乃気月也嫌ふ也　しくらハ一句も嫌し

▲濃酒　犬乃秋二句外嫌ふべし

▲あらしや　あらしきハ　新酒ふ伽など

あらし物と云詞し又語しきな月見を

○あらしや夢ぶから折れ去乃花餘りの人もすべて嫌ふん

○あきしや君もせぬ里乃よき月見　秋ハ入ぬ

▲あざ　露ニ一句一ツえ三まへし

あざ者れ　偏るといふ付句ハ嫌ふからん

▲あざしん　他の心　又気又花の月を云

▲あざし壁　帆屋余ニ居余　手織のまゝし

▲あそび　と云詞　手心嫌し

▲暑　夜し　あらく部ぐ　粧の山ふし

こん夜ニ船など　▲暑ニ　川辺ハ嫌ふし

さゞ▲暑ニ　涼暖ぎ　嫌ふ　夏ふむ

あざれ月ぜずとも二句し

○夏ならバ二暑ニ汗嫌ふとし

▲暑　ならく殘暑も嫌し

▲暑さ殘り　殘り暑さ　秋にし

▲暑さとふらく　ならく夜を忘るくまへからず　○夏ならバ二　暑さとふらくニ　涼しきハ夜

乃季さらふらべ月雨ふも不嫌くふし

▲暑さ日　日次ならべし　但し暑さ日乃

新却ぐ云ハ日次ならべからず

▲あつく　嫌るまし又あつさきんもし

▲あ川まり　云ひさくニしとらく二句し

▲東　ニ　越路二句し又東ニ居余

あ越嫌べし

▲東路　越路　筑紫など部ぐ居余ニ二句し

▲東路　ならく東屋ニ折し　ふ部余嫌

部くなまじこふし

▲四阿屋　屋の国し　繊家不船など嫌

藤部の家し　四五へ新乃家の家へまゐ

ハ夜方へ嫌ふし　夜下と云　東路折し

▲東遊(アヅマアソビ)　殺かくし　和琴(アヅマ)ニ作し　神楽し
三穂乃松原天人乃子細ふ見し 又天人
東遊(アヅマアソビ)求子(モトメゴ)駿河ニ合し　神祇しとき

▲梓弓(アヅサ)　只弓乃事し

▲あかじ吹　風棹ニ又句　乾(イヌヰ)乃風と云又巽(タツミ)
乃風とも云り　乾と巽とハ相対(タイ)つり

▲あかゞ乃液　嫁(アカ)ぎ(カニ)とも云　あかりしましと云ゝ
〇麻布(アラタヘ)しあかゞ液と云　養(ヤシナ)ふ手も人乃之分も社(ヤシロ)これ

▲践(アラタヘ)乃字　てし　新玉乃年　荒　二句　玉二句　也ハ面とし

▲新玉乃年
〇又かニ　玉乃字乃句し又新玉乃年ニ
皇と践乃かど面嫌しとく　太陸ニ用し

▲荒(アラ)乃字　同し　荒田(アラタ)　荒磯(アライソ)　荒(アレ)かる嶋
かどとし〇吹あらす笹(ニカキ)乃風かどくるゝく
又風乃荒海(アラウミ)かども荒(アラカネ)かねもかし荒金も荒ニ
折し〇又かニ　新玉　新金(カネ)ニ　荒乃字
二句嫌とく　此義尤不審也へし　但し新と荒と二句嫌と云乃謂り
同文云　荒(アラ)乃字同と云ハ　居所ニ一風棹

降物ニ二　荒野(アラノ)　荒田かとハ一　方き
一以上嫌し　風あらましき　浪乃増とき
あらましきかども　荒乃用し　とく

▲嵐(アラシ)　二し　夏乃気ニせどと山か嵐
乃嵐山西御くるべし　嵐ニ嵐山同座ハ　又かニ嵐ニ嵐山可嫌也

▲嵐山　春も嵐乃山かどく吹山乃
句似りかしバ風雅ニ二句嫌へし
〇又かニ　居所ニうれ嫌く　嵐ニ乃分も
吹山あらバ嵐　三ハ折しとく　同文
春もあらし乃句似りハ嵐の字ニ二句とき

▲嵐乃寝　吹く　風寝きさるへし

▲霰(アラレ)　只一　其外霰松原(アラレマツバラ)あるへし

▲霰ニ　音さゝ也

▲霰松原(アラレ)　住吉乃名所し　此外　非降物(フリモノ)ニ

▲霰走(アラレバシリ)　殺かくし　春し　踏歌(アラレバシリ)とも云
正月十四日男踏歌し　十六日女踏歌し　右日禁中ニ行ハる
節会し　降物ニ也　霰ニ嫌し　但
降物ニ二句とき嫌き　〇又かニ　降物ニ通

▲霰一乃外ニ屋かの霰まで又円一まで しとうく
▲霰走（マラレバシリ）ハ 所も有し 鴨所とも振らし
▲霰降（アラレ） しろハ 修行し
▲あられぐ 雲とも多し 万葉ニ鬼霰（アワレ）と云
あられ笠 仏家へ行くよくへし 原ニ一又外ニ
あられぐ 一外ニ あられとこし 句ニ ○異本ニ
○あられ玉乃山松乃音 此句又の字
大切なる庭秋不用なし とまく
▲あらち男 猛き男し
▲茶（アラタ） 茎ニ二句し 竹紙
▲茶犬 叔父ニ似たと又季部
▲茶川 禁中乃茶川と云又清
ともよし 頭光ハ清の水ニ居川し
▲あらの黒髪（クロカミ） 黒ニ似たと仮句ニ似へし
斧乃頭乃ハ出不尤ニ黒し 古ニありまりかとニ 殊し
▲菖蒲（アヤメ） 夏なし 折乃あやめ
もかくしてもあまし 植物し

▲菖蒲乃枕（アヤメノマクラ） 夜し夜かくし 植物し
あまし かの日おし
▲あやめもあらぬ 分別（アヤメ）と云 ありなに あまさるし
▲あやふ あやかくと云 月し おかなくと
云僧侶（ゾウゾ） 斉頂ニ 愛相（アイサウ）さんし よし
ふしろちがいなるし 総角（アゲマキ）兜 蓋
あなの字し 古ニこれかといわも斉こと注え
備え付くニ葉花ニ鳩とあな結句乃花のや
▲あやおりく 文乃字し かのなさんし
文乃字ニ 文句 短 服装流 ○斉程ニ 要
なくハ文交（ナキアヤ）しさかななんしあるなく
ハ無罪（ナキアへ）し かのなさし 其なくむ部
さんし かのなくハ 無相（ナキアイ）くし あやふや
やまと同しこともあるべし
○あふへてまなへ花を揚かけしが段のまも社あれ
○云乃ハ伊勢ハあな部 禅苑之社ニても宮かかる
○家は梅紫（ヤミ）へあやめは句ハ武 家柄
▲あやかてし あやかし乃下器乃ある

○匂ひぞ風にさそふ此梅花なきさへあやかなしと花なとか
▲あやしき 二し 哀しと思ふべし 異称號 奇
乃字よ奇の字をもあやしとよむべし
▲危(コハウキ) 一座ニ二 嫌ニ二句隔し あやふき
▲あや莚(ムシロ) 美(ウツクシ)き莚し 又綾乃縁也而嫌ふ也し
▲天(アメ)乃字 同し 空(ソラ) 中天(ソラ)ニ二句隔
▲天(アマ)ぎる雪 秋し
▲天(アマ)と 尾(ツク)と見初しなる例なき
▲あまのはら あまのさし 同調し 天霧(アマキル)
天霧(キリ)と云 霧雪(ユキ)ちられ ちらせとさんぎり ことひなるし
○梅花それ共ふなど天公の天霧(アマキル)霧れるかへもあれバ
○天ざかし夢や霧雪(ユキ)梅乃花 心敬
▲天河(アマノカハ)ニ
銀河(カハ)銀漢と云 天(アマ)文(?)る 中天(ナカソラ)二句 空(ソラ)二句し
本乃渡りなど秋なニ 二句と目ニ 天川 結ぶ
哉なニ非ど光也ニ 非ど 七夕又月 三句し
▲天川 舟ニ 渡(?)く非恋(ス)ぎニ 秋し
哉なし 舟乃字七句隔し

▲天川乃逢瀬(アフセ)又紅葉乃橋などは秋也ニ
非ど秋なるし 天川舟も秋し 天象ニ二句
隔し 二星乃事なれバし
▲名所乃天河 二河内にし星也 初而也と云 天(アメ)ハ雨し
中天(ナカソラ)二句 空(ソラ)ハ三句隔 秋なニ非ど雑
但し逢瀬などくハへも星(ホシ)乃事ゆ
らひなるべ句稿秋し
▲天川乃逢瀬(アフセ) 秋也ニ非ど又恋也非ず
但しうらやむなどゝあれバ恋也し
▲天浮橋(アメノウキハシ) 天岩舟(アメノイハフネ) 冬ニ非恋(ス)也ニ 二岩舟ハ舟ニ七句也し
▲天岩戸 非恋し 岩乃縁相なニ衣ニ隔し
▲天津日継(ヒツギ) 天子流即(ソクヰ)位乃事也し
▲天降(アマクダル)ニ 下(クダル)乃字二句也し
▲天さかる 鄙(ヒナ)と云 枕詞也 国郡田舎
ハ天(ソラ)もなおひさかるやうなる所也と云し
鄙と中格と云故ニ鄙より
四方乃遠国へもいふべし
▲天羽衣 非衣ニ 天乃字七句也し 是も天降(アマクダル)に
▲天彦(アマヒコ) 山彦(ヒコ)と同じ 虚空(コクウ)の響(ヒヾキ)し

▲天橋立　丹後乃切門（キレト）利世（リセ）乃戸の名也

▲天小船泊瀬（ハツセ）　と枕詞ふしても用ゆる二
二句とし船（フナ）出（スル）に　右二泊瀬吉野乃枕二泊
瀬二并吉野二并ハ廿一代集ニも見え吉野二
并し泊瀬ニ并ハ万葉集ニ見えたり是ハ
船ハ様衣て見え侍るを別（ワカ）つべし
と注と又斉注　天小船（オフネ）泊瀬なれば蜑（アマ）
小船の船と前（サキ）天乃舟船をとどめし
訳乃名し仍て用ゆる二船と并の字上下二、

▲海士（アマ）　人偏し用ゆべし　海士一
字ても里乃蜑（アマ）人名べし　里乃蜑も
名ふなれバし阿波国也　其外淡路も

▲海士　湖海（ミヅウミ）ふもよめり

▲海士と尼（アマ）ふ取なし文句乃例多し
▲海士乃て縄　焼よれ船とたぐる縄し
捲縄（タクナハ）とも　斉注ニ　煙（ケフリ）と結べハあま乃捲
枠（ノキ）る縄とあれやく焼るし煙と結（ムスブ）
ハふで縄とたぐると云ふべしとぞ

○難波江のあま乃塩焼泥（モヘロビ）ぐ煙ふなからぬ貝殺の浜
○打よせてうら乃入ぬを見る浦のあま乃けむりハ
▲あま乃縄（ナハ）　是も焼（タク）しとい并縄
し焼ぬ船とて藻塩草ニ見え　ふなかく焼
▲あまれさちせ　あまれ海ふ入るよしすく
波を打ふて入とさるて見ゆとし又海より
身を打しらす　又八雲ニ人を眠く望（ミエ）
あめれよ　出る時より
さら付さるてを打てのみふるとぞ
○松山乃松乃塩ハあまむさうてを打べかりける
▲あまれ鵲（サヅ）り　あまれ捕まひら方教へし
▲あまくて　其外ニ只二し多二句とも
▲餘（アマリ）と云字　只と蒸と二し
▲朱乃玉垣（カキ）　神祇し　又玉垣と云ふ
神祇ふわらず
▲朱乃衣　又経乃装束し
▲明（アケ）乃字　又向（ムカ）ふし暁（アカツキ）ニ二句とし
▲明る　秋ふ付ふて打越ニふるく下宜（カウ）
▲明乃字ニ　日を結く船秋ふ二今日す
旦（アシタ）ふし
▲明ニ　朝（アシタ）又出るむと云詞二句と心得

▲明ニ　明日二句也

▲明ニ　横雲付べからず　横雲ニ明
付くれバよし　○是ハ明ニ横雲付て
くるしからず句様ニ随べしとなり

▲明ぼの　明暮の　明しも果ぬ　明し果
なり　明離(ハナル)　明も離れど　皆日数ニ
肥ど明夕(ワケ)時分ニ二句也　又明ぼのく
明果く日西ニも不去　○是ハ二明も
離れぬハ有らんぬ分れバ彼衣(キヌ)ニ衣乃
羽衣いづれも日数乃中もさとしとなり

▲明やらぬ秋　去し　後朝(キヌギヌ)同前

▲明離れニ　不断(バナ)ど鷺(ヱカ)鷺(コヘ)などと分け
西嫌し去して離(ハナル)ニ放(ハナス)西嫌し

▲明暮(アケクレ)　とつぎさる間時分ニ何も
不嫌し夕乃字ハ西ハ二句明暮乃二（是ハ二明乃字もよろしと云）
字ハ日字去し明夕ニ暮の字同前

▲明暮(アケガクラ)　去るし時分し暮乃字
二句可嫌ゟ　○是ハ二　夜乃明んとて又

くるしからずとなり（此本乃点ニあけやらぬと云　有去るハ明がらうと云　あけぐらうと可読云るべしとなり）

▲明暮(アケグラ)と明鶯(アケウグヒ)又句也

▲曙(アケボノ)　てし　夜分也　時分也　夜分ニ而去
明夕庭(アサコラベ)ニ二句也　又明乃字ハ何れも
二句也　又云明曙(アケボノ)庭ニ夜分なれバ去嫌
又句也　夜分のがるれバ二句也　○是ハ二
曙ニ分れて分れめく二句嫌となり

▲明日(アス)ハ一也　今日(ケフ)ハ二也　昨日(キノフ)ハ一也　明日ニ明
乃字ハ二句嫌也

▲明星(アカホシ)　明るニ二句也

▲明る侘(ワビ)しき　明る分すとし

▲総角(アゲマキ)　衣乃事わるらバ衣ニ又句
人乃事なるらバ衣ニ而嫌　奇様ニ又六丈
十五人ニも児(チゴ)乃髪(カミ)結ふ時分也　総ハ
髪(カミ)ニかざる総(ノガ)也　角(カク)ハ角(ツノ)髪(カミ)連髪と
云ふ所ざ云也　又東方ハ羅(ヨロ)綴(ハラ)總(アゲマキ)乃
上ニ結ぶる総(ハス)也　又里(サト)乃総角ニ而総
と云事(ロク)乃るし　○様ろうたふあり是れの
神かとあり

○くろき計ハ總ろ牛の子とよむ句
○總角乃鬢乃髪乃ゑのこゑぐれ
▲總角とふ・從る事し　象物くちかる　抱き男女
▲葦句ハ　名所ゆくも恋ゆくも若
▲葦ニ　寒き涼　身にむ　流じ
靡などはニ句嫌し　但し秦乃靡恋乃
靡などゆれにて　涼ハ嫌し　何事も
靡ハ夜し　捨置ハ秋し　○又かニ
▲靡　涼黒き歯付　付句嫌とき
▲靡　ゑとく蝙蝠のべからぬ　古ハ付かすにて
▲靡ニ　鷹付合し　所ニ
○笑靡も夏かし物わかれ秋乃靡などさくる所に
▲靡ニ風付くらへからず
▲靡乃風　風樂ニ二句し
▲靡垂　おりね　捨ろとしても秋し
▲逢　相合　此三乃名又句さるべし
▲逢て　合ゐるも折し但し拘ニ嫌べし
　又かニ逢ニ合ハあふとして又句嫌し

但しあふニ合ふとあらバ二句嫌しとぞ
▲逢ニ相二句しめぐり逢ニ相宿と
などの類しとぞ　○又かニ嫌し
▲逢ニ　相坂も二句嫌とぞ　古同じ
▲逢て　星合等折し　古又かニ合ハ又句とぞ
▲逢ニ　別ふ嫌　但し一旅句躰ニ嫌流
▲相坂　山城乃類し　相逢　合ニ
之字何逢ゆくも書段逢の字二句と
○又かて　相坂ハ旅て眺ど　但し句躰ニ嫌
べしむさし嬰などもおなお
▲逢恋　二し逢乃字なくても逢ふ
乃句ハ又ハ可へなし又云あひおりのお
逢恋と眺ど一句嫌べし
▲あふ瀬　瀬ふ嫌　但し句に依く間
川あふ瀬などハ二句嫌べし
▲合　あひ　四嫌し　山合などし
▲あふさきるさ　行き夜かるさ嫌し
行ゆもくるも二句し

▲あふご　逢期(アフゴ)し　それとも又一つ朸に
人名のるを重荷に担(ニナ)ひてあふごに社(ヤシロ)もしかられ
○よそる重荷や三綱(ミツキ)なるらん　と云句て
○荷(?)ふのとあふごとみむ恋ぐさに　家祇

▲近江乃海　国乃海し名所し

▲近江乃三津ハ　志賀津　粟津　大津　こまく

▲榜(アフチ)　夏し

▲葵(アフヒ)　夏し　葵と鬘(カヅラ)をまかげ
らくさし上乃葵草を出つる神山乃
葵にかざし人に葵(アフヒ)かざしてても夏し
桂祭て二句し　○又まつりのかづらとあれハ葵乃事しとさ未二句を
▲あかゞれ　あかゞれ　冬に定乃所て(?)後べし

▲朝(アサ)乃字　定し　朝霜　朝風乃やうし　又
あしたと一と朝と一　朝日乃裏にゐる
べし　朝ハ六し　朝日のわし　あさ二けさ　わさとけさ(?)

▲朝と云句て日只出つるのみに離(?)し

▲朝(アシタ)乃月　朝乃字入つくれてし夕も
月おもし又月乃ゆるしくかゞ　新(?)らく

なべし朝乃月の様作りても一つと云
事に謂夕月同じ　これ夜なし(?)　朝乃月を
て月の明ぼ果てなどもなしまぎらはし明
ぼのゝ月などゝあるべし　夕乃月あるゝ
暮(クレ)乃月なれしなれ乃月とのるべしと

▲朝久(?)　とふべく明暮又もやすみ新(?)

▲朝寝(アリボン?)　只時なし　あの名に離

▲朝ひらき　朝がらけく同じ

○とれ海に朝霧乃て漕られハ长(?)須洲(?)月照(?)ぬ(?)
珠洲(スヽ)乃海ハ能登乃名所し　昌休　二句二
○湊(ミナト)舟朝霧して出る秋かな

▲朝凪(アサナギ)　月明なし　朝まぐし

▲朝和(?)　あらしとも云なし　海上乃様

▲朝附日　夕附日　只朝日夕日と云事し
維し夕附日など名乗るとてあれば月と
日くあらぶかに叙して二まへに用あり
徴ハ月日名残し句ニ続べし　月ニ七句

○朝附日さすらく湊の家に新(?)　紙巴

▲朝月　此羽ふ好よしと人の述たる
有明月雲除寄出座に行れバ若し
かろずす。○斉注ニ只あさけと読べし朝
あけとわすどうなきくさむる　宗祇口伝のえり也
○附尚けまれ朝けにかゝる彼ハ安らん朝あやとらん
○海にあれバけふ楽之飯や草枕旅ふしあれバ椎にもたる
○旅ふしあれバ哀ぐさともあり
○朝けまる旅が椎乃之旅なるそ　家租
▲朝け　けりやられけりしふ続し
▲朝食乃煙　無常乃煙ふ似れど朝乃食
を炊煙し夕け乃煙ハふ知るべく
▲朝げ　朝夕と云同し
▲朝寝　朝ゆふく祐なるべし
○行ゆく秋庭ハせず荒れ鳴巻ゝ実バ朝ぬせられ社
▲朝餉　天子乃朝の供御し
▲朝寒　秋し寒た朝明かどハ為し
光自によりて秋と冬とみるべし
▲朝清　只朝乃掃除し　禁庭にいふならし

▲朝戸出　朝とく出るをし　夜戸出ハ
夜出るをし　太こよ乃字こ注ス
○川乃白の乃さゝられ乃法　と云句こ
○山城乃ふしでふさゝる附鳥　睡助
▲朝立小野　たりど濁るべし
見ハ夜卯出と付る句し
▲朝妻　多く亀ニ作れど三江乃名
而し　且妻とも云文浅妻と書たり
▲朝乃栄　朝乃字浅乃字た二大句振くゝ
名而し　朝ニ而し
▲朝鵆　鵆濁るべし　書こし
▲朝霧　書し　朝鵆同かし
▲朝鳥狩　雑子こ面連　多心ハ行路
▲朝らしハ　夜こうら　又名ともいふし
▲朝顔　横し　秋し　朝貌句計連し
○但し朝乃奥ふりくるくハ二句し嫌らる
明日も朝暮も包定束雲ハ南続
○只和こ　横こ朝乃字二句連し　子心々

付句とは其前句と別は付句に限るべし
夕顔に夕の字は大句に限る例之ときく
○前注に 槿とは人の句の題に読む一首
○暮に迄て句其聊かられのく旅は数句紅葉にや
句其は句かくに候ぬるへく鑑(ケカリ)文数花く社られ
○孫兄乃秋に分を読く法 と云句に
○浅茅や雉が句秋の花かな 家紙
▲浅 乃字 暮し 句し ○哭哉二 浅の句
浅しとまく 前注二浅の字表し浅に浅に強 とくく
▲浅間(アサマ) 亡父も山我乃様し候し哉
世継用乃卯のうし ○哭哉二 継母の郎とく
▲浅間山 後例し 種類(ゴゲン)の強例し
山かれ 今書 燦 萬乃深あり
▲浅熊山 伊勢国 内宮乃上し
▲浅茅(アサヂ) 亡父の居所に嫌ども 植物し
茅乃浅茅が中よりも居と前に
▲浅茅生(アサヂフ) 雑し 生乃字をかれば居
外に二句嫌 外 植物し

▲浅茅宿(アサヂガヤド) 居所 植物 夜分く式に嫌
▲浅香潟(アサカガタ) 備前乃居所し
▲麻まく(アサ) 春し 只は夜し
▲麻手かり花(アサデ) 麻乃花し 夜し
▲麻衣干(アサコロモホス) 麻かとし
▲麻乃稚 夜し 押して麻は衣し まく斗[illegible]
▲あさる 求食(アサル)と云 求食(モトメ)さること部
▲あざむく 云ぶる事すめし或は色[illegible]
知家がし物とらし欺(アザムク)と云あ家(ガ)ロ乃心し
又何か人家をも云くわざむくと云乃意
とろうしわざむかれてとく[illegible]
○鵆(チドリ)の胸にがしや吹風に終や乃来るをむごむされて
▲秋乃気 て 紅葉乃心し 植物く式に嫌
本乃葉と云うる故に本乃字に二句し
○哭哉と 本の葉るそは前注る紅葉に制嫌
▲秋風 二し 又秋乃字に風儲く一つも
云べし秋乃風と二は外 ○哭哉
秋風二 内一秋の風がてても又 只秋風く也うも 哉外に秋乃に

秋風なども之れにならへからずとなく

▲秋寒し　つゝし　秋の寒と云詞ハ漸(ヤヽ)
寒(サム)　秋寒　朝寒　夜ぐろの寒く　皆秋の
寒き詞也　此内ニて　秋湿(サエ)ると色
此句にも秋の寒き内ニ有るべからず秋にて寒さを
とれるらし　秋寒しとかれぬかるべし

▲秋涼し　秋の涼しさとく云雑ニ秋の暑(アツキ)
とも云雑二句嫌べし

▲秋乃夜　と云句　長きにあらが秋夜ニ打嫌し

▲秋乃月　秋の夜の月を同面ニ二六い
ぐ一の季をよみくるべし

▲秋の田　と計の植物と非ど麻ね麻房(コカカリ)か
ど縁なくも植物と非ど麻ねとあるく
ハ植物ニ本紙分ケ嫌　此非乃詞ニ田と嫌う。
也鳴子(ナルコ)引板(ヒタ)偃粉(リウヅ)　かれのかどりと云
それ文ハみどり　植乃非どもと云ハ何れ
も植物ニ折紙嫌べし　○又非ニ衣の紙
植物ニ二句嫌べしとなく

▲秋乃色　秋乃季を持ちに縁ありて
二も三も互べし　山乃色ニ草木乃四季乃
ことなれ草乃色田ハ色とあれどもれ紙し

▲秋ちかき　秋を待　三夜秋　皆夜し

▲秋ハ玄行ぬ　どうでも夜し

▲秋乃水　秋風乃おりハたえて泥ニ近く(入会)
をみなへし　おばな　朝顔　かざくに
ふぢばかま　くずの花　と云是くべし

▲秋乃七種(クサ)ハ

○よみてつめ秋乃七種も当季ハ下　雑也

▲秋津羽(アキツバ)　雑し　心にそらうし秋く面綾
又秋津羽ふるく蜻蛉(カゲロウ)有し　かげろふハ六月ニ嫌え

▲秋津聲　吉野上し　秋津洲(アキツス)の夫　日お

▲秋乃夫　中夫とも云　同様秋し

○月も日も穀も並乃秋の夫異ならぬのとのの怨

▲秋去姫　織姫姫　是ニ七夕乃居し

▲秋去(アキサリ)夜　七夕乃異(ク)し　姫(ス)衣(ミ)ぬ二七夕ニ
称し　例然ニ秋去夜為く　秋乃糸を
べからず　○又なく七夕為く秋去夜之人
かゝらず七夕乃刑乃夜とくしとなく

▲秋乃句のうち　平秋乃句に無乃秋乃
句続く又平秋乃句これせ付ぐべからず
俳諧にハ無ふくむなれど平秋乃句に無
乃句二句付く又平秋乃句せぬこと在も見ゆ

▲あさゝ　ふるし　ふるし

▲鵯　つゝし　寒し　秋鵯　鵯鳴し　驚鵯し　ふたび鵯

▲あゆの風　注に北国より東風をあゆ
乃風と云　あゆの風きれと云　是ハ越中の詞
○あゆの風いふ所ヲ越の国にすなはち不知濃吹く
猿公ハ国ふくの雑句に
○あゆの風の名不知の扉哉

▲雨　二し　春ニ春雨くも春雨なし
春世春に二ハ余し出し　あさ。さあ
ハ雨降し　○美なるに　雨二さあ一あま一
ハ上思し　雨にあまざるハ雨降　あまと云
ハ雨にあまざるハ雨降　大雨表に

▲雨と　月夕日と付く二句めに雲付
夕ふ雑しさし合すれ能なと

▲雨に　時雨　秋夜　夕立まて句とし　又

夕月夜乃夜。夕立ハ夜ならでも句とし
相手も同じ夜ハ雨し。美なるに　相手物乃夜
ハ松風乃夜　川音乃夜　雨也　一所ヲ止と

▲夜と　あまりながれぬる句ゆる時
夜　夕月　鶯の句とし

▲夜こ　夕立　実ハ句とし

▲夜に　洞乃夜　雨し　降物に　定題　九月　大句也

▲夜と　洞乃夜乃つまくなど　一句に結
ぶ又夜こさびしさなど　続べる句後へ
うつる又云川音の夜など云ふなれば降
物に嫌し　夜揺に一句しかるべし　前句　武家

▲夜こ　留落又三ツ二サル付る所治具し

▲夜と　夜乃うちふみなる詠と　永夜
ハ夜嫌ふべし　長夜降ハ降物に二句とし

▲夜乃錦　とゝろく夜乃錦ならべからず

▲夜乃嗅る　とゝろくさあまりなど嗅る
いし　○美なるに　夜嗅くに　雲霧乃嗅る
ハ夜句とし　時夜　夕月夜乃嗅るなどハ折嫌ふと云

▲雨をさそふに　又風をさそふ二ッ五をまじらし
○前句に雨をさそふハ雨隠るゝ雨降をさ
むかりやむるし　風も同じ
▲雨隠とる　ありとるとる折落し　続し
同し隠物とく　あれいらぐ
▲雨やどり　雨乃中宿　去に義に嫌ず続し
寺社に似へし　笠やどりも同じ
さしやれ打隠物し　あまよとれ
▲雨気　只つくしあまりハ隠物に二句え　（あまりもわま一の内え）
○天文に雨雲の。雨をくくさあるれわま
一句とく隔し　鞋にあまるくび隠　ぬり
をくくあまりあるれ内又あるべし　よろく
▲雨のよふ　雪のよれ（ホハよにハあるべし）　雨催し
雨雪ホ乃隠ん迷信らし又秋に用る
ろもるるふ好　相し　当時ハふ若とる心ろ
▲網一　ある魚ホ漁用乃加し一るそ網代
をふ加霞乃網とれ加し　網文文句可服
▲網に　魚付ざるし

▲網に　あるを付られ雲鵝あるれ網をられて
と古今乃扇乃相し　又鵝を付られ
○人似あこある名れを立略れ網乃縁をえにあるかるん
▲網代　あるし　当るも同お　網代前ハ秋え
代乃字雨し　前後とやう浴を付乃田
上ありとみく氷魚をうえあつくこえし
源仲縄のうら川乃罪重く隠る前
○伊勢武者ハ皆火威乃援こそらられ網代ホかゝりるか（氷魚ナリ）
○網代木に念いつく隠ふ隠くそ日をへてきおう紅葉えしられ（氷魚ナリ）
○あす服れ日を待かとれ寂しとええ（氷魚ナリ）
○京られやるうとあしろ乃床
▲網代に　魚をえ網ハ打えし　霞の網ハ両え
▲網代乃床　秋かに化とと居所に二句え
▲あびきする　網を引くし
▲網人網る　又網子ある（海士人乃魚をとれ　あこ乃まかまぐこし）
○大宮の内とさかるあびきをとあと網るあまれよびかう
▲足　の字　一　文雨乃あし　あぐ　あさつこう
▲足引乃山　両あいくぐ

▲芦　一　芦屋　芦火へ加へ此ることに一
芦鴨　芦鶴(タヅ)乃ことに一句よろし　此外に
芦々芦原もこれ有
▲芦乃若葉　春也
▲芦屋　十句の内にて宜しかれども（芦屋に一ツ有事ニ嫌ふ）
なるべく植物に見合これば然るし
▲難波乃芦屋　湊乃芦原ふ植物又ある
事を嫌べからず芦屋乃湊を打之一句
羽あれどもし然し句後ふ出べし中の芦
乃屋なるくるかくハある事植物ニ二句よし
▲芦乃丸屋
▲芦屋乃里　芦湊ふて思ひ出る所也
乃芦屋これ有し芦湊とハ有べからず然外只
▲芦湊　居所ニ二句芦屋芦垣ハ外
居所し是もあへしよハ植物ある事ハ一句嫌
▲芦火　芦屋　と作れハある事にあらず
植物こ然ど　然し消えも続ふ出る
打なびく　名指　下萌（モヘ）なぐくる

羽くらぶくハ植物ある事ニ句ニ二句嫌
▲芦鴨（アシカモ）　植物ニ然ど　ある事し　陰（カゲ）の
芦鴨（アシカモ）なぐくうハ植物ふも二句し
▲芦鶴（アシタヅ）　植物ニ然ど　ある事ニ然ど嫌
名指（ナザシ）乃芦鶴（タヅ）なぐくあるハ植物ある事ハ二句く
▲芦深く　芦乃よれ中ふ向く薄（ウス）れ物と
しらへぬるもとき物し　併せもなく
○難波潟刈残（ノコ）芦乃芦づのなふ露も飛やへぶつの
○なる夜娘しとへやまるらん　と云句ニ
○芦深く乃蕎さ隔（ヘダテ）れ中ふ　系祇
○芦深く乃薄（ウス）雪（ユキ）残る汀かな　然ニ而和
▲芦乃蓮（ハス）笛　植物ニ然ど
▲芦乃穂（ホ）綿（ワタ）　秋し植物衣裳ふ二句　肉ニ寒
▲芦乃かりね　菖蒲（アヤメ）乃ろくるかざゝも嫌し　撰る也
あかりね乃枕し旅草（クサ）仮（カリ）寝（子）あばハ然出（ヅ）嫌二
▲芦乃矢　追（ツイ）儺（ナ）乃疫鬼（コニ）をある矢也し
▲菖（アヒダ）ニ　隙（ヒマ）　透（スキ）間（マ）　木（コノ）間（マ）　暇（イトマ）　皆二句也
▲合（アヒ）ニ　あるひ事し　山合なぐゝし

▲陸（くが）　こし　陸（とく）遠（すき）る末乃日ふ二面あり
▲浅（あせ）し　淺し　美称こ　浅くなりしこゝろにも
あさしと云読ふ知るなしと云て　美称に浅くと見てあり　と見ゆし
▲あさづれ　一面に田やて雲かくし　と見ゆし
▲あさ乃花　毒し　あさし　毒し　る酔（アニ）ふと云るの
▲あせび　あせぶ　あせが方云
▲あせ□る　あさ□し　かりあれる経之　あせ果てかくあり
▲あすか乃神　あすか乃神ふ和寧をす　不出國し
阿騒隣（アスハ）宮ふ小寧をすと云く行ふるなを
乃海ど乃神ふ□くもしますとし
○あ□□乃との神ふ小寧さてあれはよし乃くゆとすれど
海雄別春　○今更ふ抹挽さめやもし□れと乃神ふ小寧さにとに

○

た

▲催馬楽（サイバラ）　催（もよほ）し　催馬乃名　河（こ）雅（す）続にと云る
楽乃くすり乃続し　其物ふ続く其季
を持と云るなし。弥武道に催馬（サイバラ）楽と云
乃法（ミツキ）物を持く為ある物乃かぎりなり

ふるまひを見あげてゐるひかへしるを催（ヒヨホ）
もと催り青柳（アヲ）こゝ梅がえこゝ鶯（ウクヒス）うう
こふ竹どは種物と生類こ二面あし是れ
ゆくふより季を持しるなき季を遊び
二面し神祇に祝ど催（サイバ）馬（ラ）楽ある同題
相当る皆雑し
我（アレカキ）ノ垣　葛（カツラキ）城
竹河（コノトノ）此殿
鷹（タカ）山　鏡山　美濃（ミノ）山　石川（イシカハ）
大宮（アヤニキ）　長沢　青（カナフク）金吹　浅（アサミヅ）緑
總角（アゲマキ）　更（スキ）川　鴻（スズカ）藤門　鷹（ツク）山　倉（カキ）垣　河（カハ）口
遊（ヨモギフ）生　紀（ワガカド）門　田中（タナカノ井）井戸　高（タカ）鶯　婦門（ヨメガカド）
指（サシタン）柳　何（ナンスレゾ）為　高（タカサゴ）砂　伊（アソヘヤ）勢屋　更（ハシリ）井
ちる（テラニシ）西　雅（ナイメイ）鳴　飛（アスカ）鳥井　大（オホセリ）芹　鬼（アニミチ）（三千）
以上拝く斎也　浅（アサヅハシ）水橋　伊勢海　道（ミチ）口　逢（アラ）た
延　催馬楽の祝相の　雅（ナニ）波　河（カハ）淡（ヤ）也

▲され　又さぬとこ　山面れさいもこなべさにとこの
宿し　此印器（ス）し　何事も雑し
めり見ゑし（ウラ）いり　文臓散読こ田菜と〳〵いり
支撰し

▲さいたづま　虎杖(イタトリ)也

○二本ハさいたづまの三二云おく露隔れに雅意鳴し

▲澤(サハ)　只一　居ハ二句去　二し　水辺ハ嫌し

▲沢に舟あり　伏見江　淀に澤なと

▲さはに蛍(トブホタル)　飛ぶら蛍し　多(オホ)の字之

○田鶴(タヅ)さはに鳴も同じし　沢と云に蛇なと

○飛鳥も澤くのえれハ八十(ヤソ)乃湊(ミナト)に鶴(タヅ)さはに鳴

○鴻鴇しぐまる澤も澤て行がやすし多く鶴さはに鳴

▲さはべ乃ど雉

　多き蛾(ハイ)乃多し　蝿(ハイ)をさはべと読し　蝿乃

　ごとく飛(トビ)蟻(チアリ)くさりをなす雉し　雉代共ニアリ

○又蝿(サハヘ)す物のも雉もあらし世なふハ居鉄の彼去ぬれハ

▲慄(サヾリ)の字　只と云と以上二つし

▲さはり　自をさはり風をさはらん抔どれ

　さはらんし　慄(サヾリ)乃字也

▲さはれ　二句去べし　此字ニ雉部

　前後さはれともかさはらかしさはがえんともいれ

　さはがえんしと云　此字乃通り

▲䈎(サヽガ)のまてし　わるくさゝかしきえなべ

　しるべくえべしゐ乃ゑらくみもふ定

▲佐保(サホ)姫(ヒメ)　春し　桃花(ハ)秋ハ　竜田姫附る

▲佐保姫　馬ごく居所乃佐保山なるべし

　此佐保　秋をし与の年(ネン)ハふ定

▲佐保姫　多く　龍(タツ)姫(ヒメ)云べし

▲佐保姫乃衣　桃(ス)殺(ス)ニ夜の字七句去

　佐保川ヶ又　狭(サ)ふ川ヶ

▲さかは川

　万葉ニ井八上さかは川の水世見ゆく想ふ田ふ　とえこ

○刈(カル)初(ハツ)稲(イネ)ハひとりありべし　夜お　見こえ

　連歌乃始しとぞり　又日本紀

日本武尊(ヤマトタケノミコト)自(ヨリ)高見国還之西南歴(ヘテ)常陸(ヲ)至(リ)甲斐国(ニ)居(マシマス)于酒折宮(ニ)時(ニ)挙(テ)燭(ヲ)

進(テ)食(ヲ)是夜以(テ)歌(ヲ)之問(テ)侍者(ニ)云(ク)

○にいはりつくばをすぎていくよかねつる

諸(ノ)侍者不(ス)能(ハ)答(ヘ)言(フコト)時(ニ)有(リ)秉(ル)燭(ヲ)者(ノ)續(テ)歌(ノ)末(ヲ)云(ク)

○かゞなへて夜にハこゝ乃よ日にハとをかを

是歌世(ニ)所(ノ)謂(ル)連歌之始也　今酒折宮者備前国ニアリ　私記

▲佐保乃内　姫山なり一内乃字を句とし
○寺院にさほ川乃内とし非常四年の般若寺
○梅柳さくら梅とさほの内の桜乃らしきもさほのみ
▲竿　てし　▲竿乃前　身をすゝむし
▲さほ姫すとも云　其加姫すとも云事しさほ添
定し　ぬれてさほ姫すとえあり千のま
▲囀（サヘヅリ）乃条　多と海士と共につし
水まるれ囀（サヘヅリ）りさるゝ子添し　ふるき
▲囀り　有りし
▲さへ　とも云　ざれと云詞し添乃字し
香（カ）さへ　さへさへなどし
▲里　乃字　句有し　居乃字し　古くは
句とし　里なて　里に居付るも　鄙（ヒナ）とも
▲里　て　松竹　水などに縁付く　折紙に
歳寒（スヰカン）なども初句に
▲里神楽（サトカグラ）　此居添て　神祇も　秋なし
るし　里は句にて　禁中乃かたは皆里神楽と云
○又なに　里かぐら　此居添　新式乃詞し

御とも二句隔てよし
▲里乃海士（アマ）　居添に此を人倫に此居添
但し　海人（アマ）などゝは居所にて人倫に云
べからず　阿波国乃名所し　又かに撰藻に
兼て志度浦　其里乃古歌あるは　撰集の
▲猿（サル）　人倫し　▲猿（サル）乃母　支猿（セシビエ）のぞし
▲さるり　雨し　中にあれば二句まし
さびしさつれなさ　嫌し　さ乃
勢し　猿（サル）に　さると成りのゝぐ　猿なりて猿り同前
▲さゝ　隔し　猿さのみ　猿の宮
乃さん　子をとをし　猿さは猿り隔し
▲幸（サチ）　さいはいし　柿（カキ）隔し
○さび波やささ浪屋さらはあれど大夫人の身構へ口の
▲さわげなれ　そゝれ気（ケ）もなれと云へし
木で　さゝら　さわげなれに雑と　猿にささらなれ
▲された　とも詞　てし
▲さぬる　さぬらく　さ〇　さ〇〇ん
いづれもね寝るし　されたさ〇〇〇小〇　本文云本の〇〇

▲去乃字　去し　去ニ別二句嫌べし
去合ニ飛ビ又気味無てよし
▲去の字ニ去され又ざれ乃ざれ不嫌
▲されてし　去ざれ　又ざれ　又ざれ
あとし嫌て去ざれとハ不謂じ　秋
ざれ花なし　去乃字ニ不嫌　去乃かれかじ
去ざれとハ去かれかしと謂し　さされかれ
かれかし　乃去されの花不謂
▲猿一　ましら一　外乃猿又ゟべし
猿ハ飛ニ不嫌ニ又なまし　と升も生れ
乃とも不隔てもよし
▲猿沢乃池乃玉藻　あら乃清門乃系
○夜もさとといかれせまして啼らんと猿句あり
げとサハ大和物語ニ見ゆ
○勝ある猿く見る髪を猿沢の池のおもて見るぞ嫌て
▲小芥丹　知らく白き状を猿て白花
くこかさるへて面白物し　ゆるとわとむきとさもよらし
▲猿をかくる　光猿乃らうなをきるし

猿ハ猿猿と芝生へかくらめ法ふさる
○昔畏は姫と舞くも何ならそ猿ハ世猿の渉られ
▲さはくる　さ海よふかゝ花さ八小乃字不嫌
▲猪　セ汁の糸作紙さすとら　作紙し
▲作とる　作紙し　又し　植物し
▲猪　作紙し　名し　植物不嫌
○又あゝ　夜ふし　昔乃字ニ又句とよ
▲酒殿らくふ　居流と二句
▲酒乃花　物影く可し　酒一
盃一　鹿脚一　酔一　此月背折嫌し
勝昔ミとや喰物し　○又あ一　酒乃さる
不影くらし似て　高時ハミも可もなし
昌猿去り　酒盃酔出　私鹿脚　清脚不
乃嫌し　脚乃字ハつし　酒とくあわて猿
えくひらもゑべうぼくよし
▲盃乃花　盃乃影　嫌し　月也　猿し
萩から二句　月ハ又句　月ハ二句嫌し　月又句
ハ萩乃季あるぬ　月ハ二句し　○又あこし
猿雲ね

新式紹巴昌叱乃云せしく表乃句也とを
とある太に蓋に定盃乃お
白氏文集乃詩也云々す

▲盞乃臺

▲盞(サカヅキ)乃字　花なくれ一文人乃上に有るを

▲榮(サカフル)乃字　盞(サカヅキ)に而居し終と云ふ

▲坂(サカ)　角(スミ)　榮(サカユ)行又云ふべし　とまく

▲坂　只一名所二一也とも　山数乃辞し

▲坂こ　丸打(ヅンブリ)付る事錬へからず　さうし

▲嵯峨(サガ)乃奥(オク)　桃(ス)に山数にさがれ野をる也付

ろうぬ　法輪(ホフリン)るならずしてすへし

▲堺(サカヒ)　てし　田乃さかひ等し

▲さうし河人　うころそ都々へし

▲さうしら　意うし　挑(サカハシ)し　さうしらの人の中にさそもし

▲さかなれ　盃(サキ)乃字而居　ふ禅(サカテキ)と云　悪(アクテキ)乃字とも終し

▲さかなと有くも同じ類し　あさふ都々　つるの字とるへし

しさかれとまへし如意乃数為し

▲さびれ　鬢(ビン)乃さびれとし　さびかとの とぞかれり

○さびれ　まとひや柳乃ちり枝　来山

▲さう羽かく　鷺(サギ)鴉鳥飛もさ友らく　少々雑乃合

○菜摘花と乃さ羽春菜少(ウキクモリアリ)さ野花拾もこしも

▲小夜(サヨ)　只夜し　小夜一夜末は二也とく

▲小夜深(フカ)に　鳴ねられとくる中今の事し

▲小夜乃中山　桃(ス)数ゐに　夜乃字に又同し

○是扨ハ中乃字に又句嫌　小夜に好嫌

至要に　さや乃中山と云ての　夜乃字に二句隔つ

▲定(サダメ)乃字　何なく二件すべし　定めれに

六に雅良とさがなさは不
得文悪しと云ふもとれ
○是扨ハ定

定二句し　不定(サダメナキ)と云

定乃字ふ嫌し定の字の目指
不嫌とべし何定の字と意るも

乃字打嫌抱るうれ二とも可然とも

▲さうりに　さうり而嫌へし　ちるれ又同し

○是扨ハ二句紀二句嫌とあし

▲ざれと云羽　なと去乃字と嫌と

▲さびなし　又さびと云ハて一ちる

へし嫌二てし　重て同去へしてさるこせ

并も二ちへし　さこなも二乃外に去

つゝらハ二乃間し　さびハさりし

の露 是非ニ さらぬ一 さらぬ二は上三ニ
とり心得べし
▲さらぬ　猶学ぶべし　誘（サソ）ふべし
▲五月（サツキ）ニ　五月雨　五句　月の字も五句に
○是非ニ　五月は二句にし又云神楽月
五月などに五月雨の字ばず雨ニ月ハあらず
五月雨と五月べし　月次の月五月の月　五月雨の句
嫌ふし月次の月五月花月古今の遠き句へ下
▲五月ニ　五月夜面と嫌ふべし　是非続
▲五月夜　一　同じく　五月折をへて可べし
▲五月夜に　梅の夜折に可べし　○是非ニ
五月夜は庭と海などと云ても五句去べし
五月夜一　同じく　梅の夜去べからず　折式
又は梅の夜去べしとし云々
▲五月闇（ヤミ）　非情ニ　五月雨ニ　夜　露
▲五月山　　紫陽山ハ非季
▲薩摩（サツマ）　猶人なども　荒（スサ）み野同じて
▲早苗（サナヘ）　非情ニ　本植物し去人

とりハ植るべし　苗代ハ植物ニ二句去し
▲早苗（サナヘ）ニ　植る田嫌ふし
▲早苗　同じく　苗代（ナハシロ）折を嫌ふ又去べ
し　夜し　五句去ニ嫌ふと
▲早苗　苗代と田　前ハ二句去べし
苗時ハ只句し
▲早苗　早百合（サユリ）　早桃（サモモ）の字　折を嫌ふし
鳥（ナガラ）の字　面去べきゆへし
▲さらがら
さらがらと云詞ハ古きまゝと云ものハ句
猶し又　さらがらと云もの　たゞ去るもの
さらがらに面し　延宝
▲更（サラ）ニ乃字　二句去し　諸事今ゝ
さらにあらずそれ更し　更（サラ）ゐハ付句も面庭
さらでも荒（オホ）ゆる庭し　二つ是非ニ　さらに
の字　面を嫌ふしと云々
▲さらぬかれ　さらぬ浮かれと云詞し
さらにもと云がれハさへと同じ又さらね
別（ワカレ）と云ハのがれぬ別と云へし

▲さらし井　六月ニ井乃そこをさらへゆう
なし　○当世俗ニハ七月七日を用
▲ぶらんこ　二し　▲ぶらんこに乗ふ雑
も又ぶらんことあれバ二句もし　只ぶ雑とし
▲寒(サムキ)　乃字　春一　秋一　冬ニ二　此内冬ニ
外ニ似し　此の内冬ニ二嫌二し　嫌ニ二の内一ハ冬の心なり　一ハ春秋の句ニ
春秋乃寒(サムキ)ハ冬乃嫌(サエ)也し　春秋の
嫌ニ冬乃寒ニ冬乃寒ニ冬
乃嫌ハ格し　嫌ハ冬ニ一春秋の　○夏ニハ
寒ハ冬ゲなる故ニ冬ニ一し　似季ニ一ツ上ニし　冬ニ嫌と
春秋ニニし　寒と嫌と　寒(サムキ)と嫌(サエ)の嫌
ハ季(キ)替りてハ両様し　同季ハ格嫌
し春乃寒と秋乃寒ハ両もしと　寒と
○案ニ覚猶乃如きハ春秋乃寒と冬の寒を同字同意とも格嫌と見ゆり同季ハ能く嫌ふ
▲覚(サメル)　乃字　夏乃覚ハ一同覚ハ乃男ニ
一字もし　此外ニ酔乃醒(サメ)る格替て
なるべし　一季ニ寝(ネ)覚(カメ)ふく同覚ハ
嫌ふべからず夏覚ハ去ハなるべし　中略同読

▲覚と醒(サムル)ハ両様し　但し折ハ時ニ依べし
▲覚ゝ　閨(ネヤ)乃さゝ二句嫌し　○夏ニ覚ニ嫌。非部ニ付ニ句
▲覚ニ　夏ニ付し　句論篠覚ニハ夏二句と
▲三文字　写し　折し
▲三字かな　月雨嫌べし　なるに濃を
なるを嫌ふさ事も彩し　あふれふ嫌し
▲三笑(サンセウ)　廬(ロ)山乃恵(エ)遠(ヲン)師乃門(ホツ)居(キヨ)海(カウ)
渕明(エンメイ)陸修静(リクシウセイ)等ナ友(トモ)とふ時三ヅ
く送(ヲク)りて出るとく恵遠師覚ハざ替(セイキ)つけて
虎(コ)渓(ケイ)乃橋を渡れわとき時三人一
同ニ大(タイ)ニ打て笑し　○是を廬山の三笑と言りつるや
○飲(イン)酒ニ肩をおさぐや三乃友　とふ白ニ
○ともに流あつ山もし乃上　家紙
▲作(サ)り猿(ソフ)乃渡　　大和国上野の
、　猿の色ニ　作り猿々嫌之
▲採(サソフ)　春ニ二　似季ニ一ツ一ツ上
ことみ嫌ふべし　花ハ夜ニ冬乃月ニ嫌わるが
春乃採二乃月なるべし　採ニなふざる花
ふ付るわかぐとし又一なハ書ぎと花ふ

付べしと也さなくても只二句がら
春乃季にもなるべし○夏冬に在三乃
外に採貝採田採人なとも外しよき
▲採と　花と雨に嫌し
▲採に　摘結くの嫌し
▲採乃句　付る句他季一座に花耕敷し
▲採乃紅葉　七月より末つくさし
▲採り　紅葉雁　此間に一句べし　狩場
ふ採嫌し　但し先に雁乃字嫌し　採雁
紅葉雁に採の句を嫌し　冒頭云
▲採戸　採乃通り乃宿し　植物し
居所し夜分にこれを嫌
▲採田　植物し　春し　採二の間し
田と七句し　採乃夏秋季し　深山採を
去ろし○夏冬に田と五句とさく
▲採麻　夏し○夏冬に　春し　麻乃
すそし採乃時分に麻まくをいう麻
まくの夏し　夏外麻乃花　麻手　麻乃苗
皆ハ春分夏し

○採麻乃季ハ生乃下草季なれども別季の居所れハ
▲採貝　採網　居所に付く春し　生類し
採二乃間に非人採物に採網又く採貝
春し　又云　採人り採網採貝乃間二一
採三乃外に花とも句可嫌し　夏冬に
統に　とらく採三乃外に採貝採網採田
夫部し　春と二句とく採人夫部しとし
▲採人　非人物し　春し　植物と二句
非人僧に但しなるふんをへくえし　採の句
ふりに居る人とも云○夏冬に採をかざ
とくへども云るれハ非植物し可能句
▲採乃実　風乃実　部ぐ居所に非生
俳諧乃来社し　▲採箱ハ　江州の居
所に遣　但し此段の物に　高山乃末經
山乃奥より作人居所に春と作り
▲採室　春し
▲咲乃字　定し　二句とし　咲乃字外
▲咲花　なく咲花又なるべし　折

とつゞけても無善 萩花(ハナ)得なり。○是より二 萩花は なの謂し
萩花なく 閑(ヂル)萩花もなく なく
▲さやう つし 何も附に結べし ゆへく
今一もあるべからず ○是より二 さやうに
長閑(ノドカ)に 温(ヌルカ)に などれるに 二句まで也
幽(カスカ)ふのなに 船なりの 事をなし なし
▲さやうと云に 清(タ)しき 言に 結ぶべし
爽(カヤカ)は字なし さやか たゞむ 清爽(セイサウ)と 続(ツヾ)く字也
何し 月のさやかなり などの 清乃字無し
▲さやば そこよくし そこなく無く 云し
○是より二 ここなぐこ 結 風体二句也
▲さ山 彌(ミ)山乃やし 小(サ)の字 附句 結
▲小(サ)と小(サ) 乃月二句し 小夜 小男鹿
乃小(サ)すし 又挿鹿 小(サ)ニ小(ラ)ハ附句し
○是より二 小(サ)夜(ヨ) 夜山 夜衣 夜(カ)莚(ムシロ)ハ付
▲小(サ)と小(フ)も 付句 結 さとこハ 文句也
句も 無結とる 心得とよく 同是より
大一是二六 二句とあり 小男鹿 小田(フタ) 小森 なれ

氣付句升し 男鹿(カ)ハ如何も無結 とよく
右二小鹿 小萱 等なの その字なくバ あらず ととゞもことども見ゆ
▲夜(サ) 衣(コロモ) さらぬ衣し 双紙(サウシ)ハ 大武二 結り 結し
○夜ぶすまぞ 旅よそそのとさぶ 鹿の衣 月 如許なり
▲さゞ波乃國 しは乃事し
▲さゞ波や あづまの山 さゞ波や なれ山
さゞ波や 大津乃宮 あぶれ 枕詞ニ 云也
▲さゞ波 さゞれ石ニ 小乃字 二句 結
晴れ 鳥 し
▲さゞれと云羽 つし さゞれ石 さゞれ荻(ヲギ)
さゞれ乃 鶴乃 事し
▲さゞれ荻 さゞれ波 さゞ栗(クリ) いづれも
小乃字し 小(シ)小(コ)ニ 結 常の如く 二句也
▲さゞれ石二 細(サゞ)波 結 なるべし のとくし
▲笹(サヽ) 一 云よく 笹(サヽ)葺(フキ) 可なし 以上二し
○是より二 芦(アシ)なく 芦ノ葉なれ 結し 云よ
▲笹二 なれ。云よく 山なり 何れも 重 結し
什文句し ○是より 云よく 什文句ニ なれ

八竹乃細工し又竹によく二番によく
乃名は篁も同お此縁語也
ささ乃露ささこれも尚ときく 木に竹の類之
▲笹葺 草庵など又笹葺に居所に二句し
▲笹乃庵 捨粗と也など
▲笹枕 捨粗之旅寝し 草枕とちかふし
▲笹竹 大丈人などく又旅宿し 其夜
ささ小田は 笹原竹藪などされたものや
○笹乃は笹竹の大丈人に類も好まれて
▲笹竹ふく ささ波ふく 寒し
▲ささめ刈 難し 笹原くさ草の叢
小男鹿のなくし 前中あやうみよさとより
▲ささがに 此字蜘蛛の糸に也 蜘蛛し
▲私語 秘めし 睦言し あはし
○夫かに睦言の秋など恋など多く
▲崎 出一 名所に一句よし
▲先 乃字 大方の文句なるべし 但し遠景
されば先など先し 其間光よし

▲先達 まりに二句迄
其乃字に二句の又あるに
先乃字に二句縁となく
▲さざれ石 ささ埋みし鶺鴒など
▲ささくさ 草に花など秋寒し又枝
木をなよし三枝とも
○此頃は冨貴也三枝の三ぐさ此殿作りて
▲鷺 飛ぶ鳥也鶺に 鷺に竹乃林
付ける句々は林乃縁ありべし
▲さらめ 雨し 村雨 春雨 小夜の雨
▲さし枝乃ゐるも哉 枕羽し熱して枕羽
あるかし さし枝とは
▲さしなき 八雲乃此社にさしあらはと云
るよし さしよしとあらし又洞もさし
くさとの洞ぐむし
▲さし物がし
○さし物が首を今は
○大和

▲さびしき　さびしさおなじく云類也二し

▲さびしさ二乃字に神さびと同じく嫌ふべし上ゑ
と云ぬ誹乃ものとれば神祇に此ど神ノ字
なき時し経先も同じ神さびてと云なり
てもなし○又なにさびしさに神さびて雨覆

▲さびしさに　旅枕雨猶しもさびて哉し

▲さびしさ　二　閑に二句也　あの時わ動く　関

▲さびしさ　旅乃句懸乃句に加へ会ずし
无用し候くもあしされども際　物経
かくれなく候くらんくるしからず○又わた
さびしさ花は意乃句ぢ　さびしさ云嫌へし　とかく

▲さびて　てし　さび鮎とくなさびてか
神さびて寂さびくかくに又て神さび
て　あさびては猶句し　あさびて二さび
しき二句り　嫌去　あさびくもさびしさ
なかはるてくし　又見と言の風とさぶ
らんかどはさるなし　俳乃字とさく　太にも　体す

▲遊に　花のくもらふぶらはし

▲さび鮎　秋し　錆鮎同じ

▲さもあらばあれ　是に二句し

▲させし　あく蓬生なとへし秋なる下

▲左近　別し嫌旅にも雨猶ても同じ

▲右近に　又義乃前へに二句也　物詞

○又なに左近に飛　初り猶くゑく

○さくらの句や左近行ねと読んど　此句迄

▲左近に　流罪の事也流罪とふて秋し

▲さすが　と云詞　秋し

▲さす　と云字　字去也句し　日乃さす

門さす何れも云への句也　月の字
あく又日のさすなと月と日のは秋く
又見く流日乃字く

○　幾

▲際　と云字　秋也　去際　別る際など

二種有へし　▲際に　此二字は　二句去へし

▲際に　限りぬに続く二句去べし　一句としる
刊し

▲さゝ胡ふて　競乃事ら　ならふ天
▲几帳(きちやう)ニ　本乃字ニ雁　衣類ニ船又
▲霧(きり)　続(つゞき)物し　降(ふる)物ニ衣紙庭
○是なニ　降物ニ二句　隔り物ニ二句ときく
▲霧ニ　霞続く二句し
▲霧ニ　雲続くも　蝶(てふ)続くも　夜ニ引し
▲霧乃晴(はれ)ニ　夜晴乃二句　霞晴乃雲
晴乃秋とく乃晴乃外折隔し
▲霧雨　近く霧乃降ハ去し
▲霧乃降　霧乃立隔てと降し
▲霧乃籬(まがき)　居所ニ二句　垣ニ而しなき籬
　去ル折隔し　続りし隔物ニ二句し
▲霧乃海　雑ニ言ふ海ニ乃外し
○是なニ　されなる霧乃降ハ深かるしきく
▲霧乃香(か)　霧ニも香乃ことくなく
　深(しん)浅(せん)ら月毛し　雨(さめ)ニも香ニも式ニ隔し
○就霧ニ言ふ人ことへ紅葉乃外
○是なニ　霧乃香と　霧乃煙と云統　斉月なく

○霧乃香や　鴨(つむ)しくす　累乃葉　紹巴
▲霧乃立ニ　夜乃立折隔し
▲霧立人　秋し　急し　去ることなかるへし
○今ハ早秋霧の人まて　霧立人を名所やとりて
▲きりの原乃駒　駒迎(むかへ)秋し　旧来ハ信州の名所　今ニ駒迎ニ混る
○杣坂乃霧乃岩に隔てゝ山立霧ふかきの駒
▲蕣(あさがほ)て　秋し　○是なニ　此外ニ蕣ことふる
▲蕣ことふ　冬し　夏にも冬乃外あるし
蕣一の句し　其外ニ二句　○是なに一蕣
ことふることく外ニ言へくし絶てなく　蕣ニ其のかことく　むりに泥し
言競あり時ニ続へしとなく
▲桐
折得くも秋し　一葉落ハ桐乃
ことし　葉乃字ニ含付　花ハ春し　二月のゆし
▲桐ニ　霰(?)孫(ソン)続と　鶴ともなるへし
▲桐柿乃落ハ初秋し
▲桐ニ梧(スヽ)鳥　鳳凰(ホウワウ)乃ことし　聖徳太子乃座也　和字所ニ
○中くふかれ扇乃香ハ出て　桐乃葉ふ落　世秋乃今月
此所　遅(オカ)鏡(ケキリン)を打　配(ハイル)流ちなれなる此書

乃萩　配所にて
○思ふかれたる帯は古に増らん也とも人乃久ぶされ
此作に依て配流と見されて又は遣されたると
○歎も扇が此代に出づべし　と云句に
○扇もうぶうしや桐に栖鳥　ちか作
○疵有れ初とあれは桐乃一葉か引　心詞
▲桐の葉　禁中又は金の内　徽象へし
▲きり婦乃鳥　葉に輻とうとうやうに
くこ乃わる鳥し
▲きぬ　てし　○又なニ　濡衣　きぬく
ゆふこし　きぬと云物　衣ニ又句隔てとく
▲きぬく　衣おも二句隔　きぬ又有し　衣打ニ二句隔
▲きぬく二　別も物も二句隔　是乃
別き物おかれへ西隔べし
▲衣くばり　昔は多し　今は難く漂じ
玉着老二至　○又なニ八　多しとなく
斉経二　正月乃衣裳を妙かうしとなく

▲碪一　ゐく夜きぬた打　碪ぬ殿二
▲碪　枝又句隔　○又なニ　雨夜出るとを
▲碪　衣打二句　きぬたと云く又句隔
碪うし　夜碪　月のぐらきぬた打し
▲碪打　とも出す隔し　打きぬたぬさこ云
妻し　打きぬたとう打ふみ嫌し
▲祇園会　六月七日　卅五より八坂ニ祭す
又月十四日し　是を幸し　祢乃宮と云るし
▲清乃字　物かうべく二種なるべし
清見　清滝が下へ西し　又なニ　雪も又句隔
▲清滝川　山桜はあるし　常の滝と同じ
山城乃名所　愛宕乃麓し
○清滝をかい清滝川のみの要殿
▲清見が関　名所辺稲田乃部し　仍ハ稀と云
此山桜見又句　清ハ西し　清見有云
▲清見寺　名所辺稲田乃部し
▲清く和く月　四月し　清み天とく弥二モ有り
▲清まわり　精を見し乎之精を

なくるし　○又云二　神祇し　紫宸殿と

▲曲水(キヨク)乃宴(エン)乃盃(ウハイ)　宵二月三日春也

名所二　行越嫌　冬し　十一月　中酉日

▲小祭　賀茂臨時(リンジ)乃祭し　神乃歳末(スイ)なし

み猿く　近江(ヒエ)乃所守ふ祭る

○宇多乃御時山城也花山の神ふ奉(ソ)をなさしあらん

▲小野祭　秋し　八月四日

○祭乃沢みやかてこく鳥　肴小野乃みゆるし

○焚乃外並ふまじりて沢津(シ)ておもく家み濃き嵐を

▲小乃瀧(ニヨ)　比叡山乃ふるし

▲小乃簾(ヲキナ)　家簾かるし　云所ハ坂本也

家乃句二　人間万事塞翁(サイヲウ)馬　推枕軒中睡雨眠

○山ふ楽ふるりへつきせず　と云句二

○人とられかゝらし家乃かりて　宗祇

▲小乱　風くれ風乃家へて竹縮し

▲競(キヨウ)強(カヽリ)　百草も充るし　五月五日し

▲乞巧奠(キツカウテン)　二星を祭るし　庭ふ桂を

之盥(タラヒ)ふ水を湛(タヽ)へ星乃影を移(ウツ)せるす

なを天平勝寶七年より始る

▲橘(キツ)中乃仙人　此るハなを人橘乃木を割(ワリ)

それが中ふ四仙みて碁(ゴ)を打て居けり

とて仙ハ商(シヤウ)山乃四皓(カウ)とくなるとし

○花ちりぬかかりふかかる張　と云句二

○仙人や碁(ゴ)ふ生きをとゞめるらん　宗祇

▲狐(キツネ)る　秋なし

▲黄(キ)なる果　眺(ナガメ)也二　衣揃し

▲よろこ　拝(キヤウ)祈し　果(ヨヽ)去らぬ女房し

▲こよみ　てし　又こよみふたまふたるべかり

す月比字ふ嫌　なふおもひ　初(ハツ)月　二句し

○又かこ　こよみの一　今月二　比月一　比三

乃句二句嫌

▲こよみよりおゝ地(チ)　こよみへよりおもさを云

▲こよみの瀧(カミ)　竹みの瀧　如此さくハ春　近縮し

▲蒸(トウ)　何とてもつし　他家のかゞ也し

▲蒸二　給ある中ハ重陽乃妻の祝ありし

▲葉を摘る　蒸し　三月三日禁中ニ蒸を摘りなくし　称說

▲葉乃ミ色縁(ワク)　秋也
▲葉乃花椀　秋也　非植物葉花(ヨウクワ)
青(カウ)乃すゝし　青(カウ)楓灰ニ植物ニ二句ととく
▲葉(エリ)植る　冬也　花乃字　冬乃字
かゞく踏べの秋也
▲葉踏る　秋也　前ニ冬也　附葉　十月八日
▲葉乃剛(フチ)　葉乃天　水鳥也
▲葉川　近江国名所　非夜中　山乃西
▲ミや　ト云詞　つゝし　ミのミやミミミミさ
ましく云良ふせん
▲きやくる　木霜也
▲紀布(キヌ)　日月　二句嫌　山城名所
○ミづの川おちくる乃石(イハナミ)波ふ水を被く秋乃氷月　後撰
▲衣更著(キサラギ)　月次乃月　二句嫌べし　弥
生も同前　○是ハ衣更著　弥生
▲衣更著乃別　二月涅槃(子ハン)也
月次乃月ニ嫌ととく
▲きさらぎ　僧かり

▲象潟(キサガタ)　出羽乃名所
○世中ハかくてもへけり象潟の蜑乃苫屋を我宿ニして
▲木(キ)ゝ木(コ)　一方ようくふく植物也　木ハ
二句嫌し　絶権て　木植物ニ　木と木ニ二六
戸かゝる割し　○是ハ木と木　句嫌ニし
▲木ニ薪(タキギ)　二句嫌し　▲樵(キコリ)も二句也
▲木乃ミ付　立田姫　錦嫌也
▲木乃葉して　又一ちとゝ植乃字ニ嫌
木乃もくい　二句嫌
▲木を伐(キル)　非植物ニ　樵(エル)同前
○是ハ木を伐　木を樵とても植物ニ
非ず　葉を刈ハ植物也　木を切ハ非ざる
斗を切ふ非ど宮乃内ニくも植物なれば
▲木葉乃ミ河ふ　月乃ミ河ふ山也
木葉乃ミ河のふ二句
▲木葉乃瀬(セ)　雑　木葉乃瀬植物
乃類乃ミさか泥瀬ハ同し　瀬ハ二折嫌
▲木ふ居乃鳥ハ　床(トコ)よへいのれず

▲木乃丸殿　天智天皇読給ひし乃歌
而し国々乃為ニ筑前乃国ニ在ましゝ
時ニ読給ひし歌なり
○朝倉や木乃丸殿ニ我居れバ名乗をしつゝ行ハ誰が子ぞ
▲木菟　雀鷹(スヽカ)鵂(チヽ)　木菟(ヅク)乃異名なり山
鶏ニ似て鳶ほ小ハ広き乃度實(クワン)ニして
山田ニ置も川も殺ゑ多るし
▲木乃二句　袖中ニ　被服ゝ女
▲木乃名乃内(タクミ)　番匠(バンジヤウ)乃るし
▲樵(キコリ)　ニ　大乃訛二句し　北ニ樵組ニ
▲樵丈(キコリ)　人偏し　木(キ)木ニ二句隔し
▲樵夫(キコリ)　薪(タキギ)　瓜木(ツキ)　此名所迄も打越
てあるべし　又柴(シバ)ハ元より柴ニ而てよし
柴(シバ)摘(ハエ)ばれ木乃訛ニ付くも去りかず
▲樵男(キコリヲ)と云羽　木度見し
▲木(キ)と木(コ)　五句去し
▲茶(キ)てめり　三し打越し
▲雉子(キヽス)　多く狩場(カリバ)乃為れる也狩場(カリバ)

乃外めぬにてらバ五まじさし其の雉
子多く狩場(カリバ)乃為れ打越く五ビ
分乃その為に雉子乃為し　雉子(キヽス)雉(キジ)ニ嫌し狩場
乃雉(キヾス)鴛(ホロ)ハ各もし　嫌し鷹(コヽ)毛へ不
嫌し狩場(カリバ)乃雉(キヽス)子らし　不之冬とし
▲雉子(キヽス)ニ　子乃字二句し　其雉ニ六不嫌
▲雉子ニ　狩場(カリバ)・鶉(ウヅラ)ニ　小鷹(コタカ)　前附嫌く
▲雉子　多くゝくニ良へ為去し紙
雉子小鷹狩乃外あらバ五まじ[illegible]し
▲[illegible]　嫌し　北ニ嫌ニ　狩場(カリバ)
乃為し　○美なニ萩ならべし二さり
狩れ外乃字と云字五句嫌しとく
○前出狩ニ為れ萩も萩(ヨルキ)字を去てくを
▲狩(キコ)る乃字　五句嫌し　嫌物と　ゝ
不也嫌し又字ふと[illegible]ひ去し[illegible]く
羽(ソビキ)折り物とく乃嫌る[illegible]日為れ打嫌し
▲君(キミ)　又　大君ニ一、君乃君一　打去二し
▲[illegible]乃君ハ人偏し　君大君ハ　北ニ人偏ニ

家君とかくも用ゐ大君ともいふく　帝(ミカド)
主(アル)じのことあれ共主(アル)じにして家君と
仰ぐ主(ヌシ)君に従べし　又云大の君を家乃君
に見なしたる時　哥誠に人倫のことし○是ハ
君乃君に見なして　又云○主院おもふ
人も深き雪乃中　此句俳諧花紙の
難斎乃人なれバ悪みとならず大君の用
し総て此君ハ人倫に致し君ハ天子
只一人也　親ハ父大臣乃子も表すまで
なと漬の色なきと雅ども大君乃用に於
て是乃君別にあれバ一句ハ人倫に用ゆ

▲君臣(キミニヒト)ハ　人倫也　人乃字に二句隔
▲岸一(キシ)　名所乃雑也　君所に一観(カン)
岸一(キシ)ハ上に云し　遥(ハルカ)岸(キン)も彼岸(カノキシ)乃
事也　住吉大江等ハ名所ハ名所に是名所也
▲岸根(キシネ)　君根　なれ根に擦(カク)根れ等　一切不嫌
▲岸際(キシツカサ)　岸乃ことし　聖際(ハツカサ)も用ゆ
▲吉備(キビ)乃中山　備中也是名所(コヽロフツ)とよめり六に往す

▲きびす　おさなきをいふ　雉(キヒツ)とも
▲き文字　ならぬきさ　いふなきさ　ちかし
なれど　さ二句去し　ときき　ちかし
なれど　あさし　なれどいさし二句去
世のつらし致し　孔子弟子
▲祈(キ)政(セイ)　世俗(ナ)ノ祓(ヨル)ノ祭(ナ)をなす祭　一世一度
拘(イツキ)く廣(クワウヤ)野ノ笑(コツ)をなし文(フウン)字ある一切絶
ハ時なく　都(ヤ)に徳(コウ)毘(コ)と又日(ナン)没(ゴ)河なし浚(ゴ)
最ゆ何しくその又ある所亦ある祈(カ)政(セイ)なとの亡い
ハり文子祈られし神に者あり　祈政
れ極毘よりもをげしと言つり亡　祈政ニ至る
○ころぬ人の内乃国乃人　とう云　也に
○毘乃跡山よりわか世やつらかん　糸取
○をげ　きん毘ハ拘り段
○穿もそしきもからきされ段　同
右袖乃句ハ共に祈政ハ毘ともつらかん
をなしたれとせとらる乃段乃句ハ
只なか文乃まくに付く哉をれ中の如くと絶
中されるもとし

○ゆ

▲百合草（ゆり）　姿し　所構大ふさきし
　奇にも艶し　花あり　乱れのし
▲ゆるす　一色く　又ゆるし文とうへし
▲ゆるし色　紅紫（コウシ）乃深きを禁色（キンジキ）と云
　深黄（アサギ）とゆるし色と云　聴色（ユルシイロ）と云　準り
　ゆるし色ぞ見秋（ハギ）が花乃枝とて
○ゆるし色ニ咲きたるらじ扇乃梅　背伯
▲ゆるひとる　ゆるんともすし
▲ゆるひやかに　寛（ユヲヤ）かにし　ゆるらかなれし
▲床（ユカ）　一し　敷かニ比ど　床（トコ）ハ衣あし
　床しきに二句あり
▲床しさに　恋しさ二句極
▲所縁（ユカリ）　人倫ニ比ど　親族（シンゾク）とあり
○又かこ　遠慮（ヱンリヨ）しくなく
▲ゆく末　日程（ニツテイ）すくし
▲ゆられさ　うごくゆらつくれし

舟被浮藻（ウキモ）浮草笥にありり
○花紙を入るもかた大船乃中乃ニ不地不沈ぞ
▲ゆるに　昔（ムカシ）知らし　ゆらし　大さ
　手玉もゆらにと猿り　又玉ニ浮す
▲ゆらぐ　のぶりし　玉第ニ猿す
▲由良乃湊　紀州名代乃名所し
▲行に　増る豊　行増　雪（ユキ）来
　吏加（ユキカフ）ニ二句結し
▲行末　二て　身乃向後（ユクヱ）人乃行末子の行
　然かど背向後と書し六内ニ一又た
　乃行末風乃行末ぞ孔円ニ一以上
　二し身乃行末かど言ハ行方ニ二句
　極乃行末風乃行末かぞうなり行
　乃字の句ちし　末ニハ備あも二句極
▲行末ニ　哉ハ雲乃行末舟乃行末かな
　又行ニ又句　末ニ二句
　身乃ゆく末　世乃ゆく末　かどとし　行ニ二句　末ニ　行乃也の行末也　末乃字ニ句し
▲向後（ユクヱ）
　二句し　ハ又かこ　向後（ユクヱ）ニハ後の字の二句て極　ゆくゆく

▲弓末(スヘ)て　白妙(ユリエ)西し　弓末遠く弓く
　末は矢をかへらぬ　弓末も西し　弓末は
　只てし　總ぶへ乃弓末白妙て一風雲在乃弓
　　　末ニ一又弓末とまて一ちとニ分つり
▲行末(ユキヽ)弓末　是ニ一座ニ二句まてへしと
▲行来(ユキヽ)行帰(ユキカヘル)　云所ハ不可し
　行帰(ユキカヘル)ハ帰るに二句し　行交(ユキカフ)　皆弓乃字ニ二句
▲交加(ユキカフ)
　　弓ニ二句し　帰るにも遠ふ遠ふにも
　永後　○是ニ遠ふ吹く風ぞれ二句
　遠　行交(ユキカフ)長　出しとまく　○但し交加ハ
　弓の手すし　飛ぶ手も飛ぶ手すて風乃吹乃手も
　吹の手すしとまし
▲ゆくとくと　弓と来とくし
▲弓そし　弓てをしまし　常云弓手ハ弓乃手にとあり
▲弓ぶり　をりしぐし　但し弓ぶりの
　弓とりし　袖中も遠べし　巴根
▲弓手(ユンテ)　弓次手し　手ニ式ニ遠く
　弓張し　可取し
▲弓合乃先　夜と秋く　累(ヒヨリヤウ)源乃弓合先く

○夜と秋と弓合の事ハ古き入集しき風ぞ吹ける
▲弓合乃手(リエ)綱　花乃ちちね時衣合ゟ総
　ちるとも云又そや手綱(リセ)をも云り。万葉ニ
　乙女子が弓合乃手せとまと
▲行く生るく　弓ニ二句遠へ述(ヘアユミ)懐し　行生とも云　源氏上人
○行生の世ハ寒きれど背への表乃私事て往世の
　○行く生るく國へ彼國　とも云句ニ
○常世(トコヨ)ゆく子へ行ぞ渡し表乃居　後人ふ知
▲ゆぐらぬに　ふ兼(ユツリナキ)とも云　ぬニ二句一遠り
　露乃字も二句可遠り
▲木綿(ユフ)　何ふても只一し　木綿付鳥とのかし
▲木綿付鳥(ユフツケトリ)　地(スヽ)ニ絹(?)ニ衣し　也所の
　異名所中も後らつゝ　濁りけり渡し
　○是ニ白木綿をく木綿付鳥ある
　　雖小木綿也付て立田拍浪かへ
　まとし　　るがすしとまく
▲木綿(ユフ)波(ハニヒ)　絹し　衣し　糸とし
▲木綿(ユフ)さへを　拘ちる口夜乃寒くの振ても
　ゆるぞあり。○是ニて絹し　夕(タニ)乃字ニ他
　　　　　　　　　　　　ふ遠とまく

▲末つむ花　末摘也眉にかゝるとし
○又かに　紅粉花乃上にかゝる常なしと云
▲末つむ花　末摘花乃花の紅なし
▲夕　乃字　同し　夕顔二ツ上に有し
夕とくハ打越　夕と夕顔ハ嫌なし
▲夕に　素秋乃暮　年乃暮抔二句去
▲夕に　朝付くる越能し　朝も同字なし
乃為中くせず二句去し　○又かに朝ハ暮
にも同じ事にも越去と云　夕張写ニ付合せ候
▲夕暮　て　又夕日暮なるべし　○又かに
夕暮なるく夕日暮都しと云
▲夕暮ニ　鳴る嘘　暖かど二句し
▲夕日暮　まれ助候し　日暮夜之越
▲夕時分と　夕時分と又句越　夕時分と
朝時分と二句し　朝時分と朝二句し
又云夕時分に山ふ分へと去句せぐとく
○又かに夕時分にさなくれ二句とく　朝時分に去越
▲夕気(カケ)　朝暁に二句越

▲夕暮(さ)　秋なし　夕乃字又句嫌なれ
二句青嵐と云　青ハ風にし　然し秋ハ
去字付へからず　鯨乃時分去越　○又かに
○宵に打越　秋乃字も二句と云
▲夕月　て　此秋分に夕時分も秋の字又句
▲夕月　ゑをく打越く雅れ乃月又
去べし夕乃字入るく二ハ去し　只夕ハ
秋月二られ去べし　朝乃月同の
○又かに　夕乃月去るく暮乃月嫌しと云
▲夕日　に　入日　西越へし
▲夕日隠れ　夕日乃さそ名雨し　本塚事の隠に去越し
▲夕附日　夕顔乃同し　朝附日ハ嫌し
○夕月日並ぶ夕暮とつゞくれハ月と日と並ぶ
ふりさんふく月にも日にも嫌と云
○せきちる日花桜色を花夕日や花乃時分なるらん
○時雨のし添ふめぐり行を　と云句に
○色ゑりふ夕日や花ふ白めらん
▲夕晴　秋なし　夕乃字又句天気に

三句去 宵に出る星なれば 長庚とも 又太白星也
宵の夜に用ゆ。○是非に 是哉乃発句に夜に あれ共当時稀しきこと
○夕づゝを先まぎれぬ人のかん鍋よりも焼の香もせぬか 其角
○蛍窓に昨夕波乃光哉
▲夕卦(ケトウ)
無し 物名 夕附くと云ば 占の詞也
▲夕立 て 夕は六句 嫌物。立乃字三句 去
二句 両 八句乃間に 夕立あらば 夕乃字
無し 立乃字はいふべし 如常二句し
▲夕立て 雷(カミナリ) 稲妻(イナヅマ) 付べからず 只の夜
[illegible] 若 ○是非に 夕立 と 雲を付く
折越に 雷(カミナリ・イカヅチ) 電(イナビカリ) 嫌ふしとぞ
▲夕立雲 たゞし 清し 夕立乃外 [illegible]
[illegible]に 二句 夕乃字 雨雲 立乃字 又句
[illegible]乃字 又句 起 夕附くべし ○是非に
[illegible] 物 [illegible] 二句 隔 夜 [illegible] 夜 [illegible]
乃夜乃 [illegible] 又句 [illegible] しとぞ
▲夕立乃夜 [illegible] 夜二乃如く
雨に 又句 同前に [illegible]

▲夕ばへ 花かゞれ 夕映には まさりて
[illegible] 八雲に 夕ばへ [illegible]
▲夕ぐろき 夕方に [illegible] 乃 [illegible] 夕り
○あつらへ [illegible] 乃暁乃旅中も方乃色見や夕ぐろき [illegible]
▲夕まぐれ 宵(ヨヒ)に [illegible] ねがふ [illegible] し
▲夕まし人 神楽(カグラ) [illegible] 上辛(ヒカラ) 墨(スミ) し 宵(ヨヒ)と
夕涼人と云 夜更(ヨフケ) [illegible] 小夜(サヨ) 涼人 [illegible]
○[illegible] 夕涼人乃 [illegible] 小袖も [illegible] 涼人
○[illegible] 乃 [illegible] も [illegible] 涼人の 佩小袖 [illegible]
▲夕堀山 北居(ス)に 只夕乃 堀山(バ) し
▲夕簗(ハ)川 是ハ 肥後国乃 居 [illegible]
▲夕氷(コホリ) 夕に 霧 [illegible] 氷(ツユ) [illegible]
○夕氷の [illegible] 鴨 [illegible] 羽(ウハガ) [illegible]
▲夕顔 [illegible] 夕乃字
又句 [illegible] 二句 [illegible] 鐘(コガネ)
[illegible] ○是非に 夕顔に [illegible] 二句 [illegible]
▲夕蓑乃宿 植物 し 居所し
▲夕陰(カゲ)草 [illegible]

かしこく夕顔乃花もし
○これと同し夕顔ぎぬの縁也なるて　と云也
○かく山は月常しの花々　宗祇
▲結（ユフ）　二かとあるべし　あめゆふ也にも小
柴結（コハユフ）なるべし　世須甚来縁　と出さる　又雪結れ
時分になるべし　又云田をも植る庭へゆふと云　結乃字也ともし夫に嫁入
▲雪　冬也　但し他乃季乃雪花二々
細雪雨乃雪は雨也　氷室（ヒムロ）乃雪は夏也
不輪（ニヨセン）花乃雪ゆかしくも定乃内也　細雪雨
乃雪とも合べし　氷室乃雪消（キエ）るとく
あらくも夏也○あかの初雪も冬也
同消かぬ事也　大かた他乃季乃雪
只つゐし強き雪也見し　○異本に　雅す
氷室（ヒムロ）乃雪も夏乃内也　氷室と計は
雪に雨強し　細雪乃雪は定乃外に
雨も降く　三（マデ）程なるべし　紙巴易縁なと
▲雪に霰　三句也　九雪と云　紙巴以来
ふ付し　○異本に　霰　五句とも

▲雪に風（フキ）雨も強
▲雪　霙（ミゾレ）　鴻毛（コウキ）　雪吹（フブキ）　氷室（ヒムロ）　此雪降雨し
▲雪に鳥を付て又霰（アラレ）雲（クモ）なと也し
▲雪に梅（ウメ）鶯（ウグヒス）なと結ふまし
▲雪に卯花（ウノハナ）付るも句嫌し　卯ノ花に
雪付るも大方分なるし
▲雪を桜に見かく又雪に花付るも
ぐ鶴しとさるまれ也
▲雪に山付く二はさまじきとし
▲雪乃花　桃に柳（スフリ）桃に梅嫌ふし　花乃
雪は桃柳桃に花し　梅梅し
▲雪げ乃水　雪吹　雪消　雪げ吹落
いげ也と皆春也し○異本に　雪げと
云に雪消（キエ）二八雪の降りきえしを云一六
雪げ乃霧（ミソラ）なと八消の字也し云
▲雪乃消る　更く新雪く雪乃消る
なるべし　雪乃消るは去るべからざれ解（トクル）
いれ炫の字あり放し消は五句去の消し

▲雪消 と前に有ば雪消ハいかゞ
▲雪のかきならし 二 雪の字二句隔(ヘダテ)の
事也 明闇(アキラカ)なれば隔べし
▲雪の降 冬也
▲雪の下水 春なるべし 新古今に
○雪と云たれば松の雪などゝかゝる雪の下水
▲雪よりよ 雪よりも雪の降ん遅速(チソク)なるべし
▲雪をおびしき 白ふなるべし
○白雪の雪をおびしき草葉などにも 長秀
▲雪をめぐらす 廻雪(クワイセツ)の舞の名也
▲雪の扉 冬也 雪に用べし
▲雪の山 非(ヒ)に山類(ズ) 天竺雪山の事也
文もおなじ庭に雪山を作るハ冬也
降物也 是も非に山類(ズ)
▲夢の字 七句去也 大方意(ココロ)し旅の
句作らかしらハ 結し 仮寝(カリネ)の夢を
見夢(モトヨリ)結し 旅の夢ハ雪にもさるべし
春秋(ハル アキ)の夢などハ是ハ非にあらず又云

夢と云ふ句もさまざまとも未に例あらず
▲夢々 夢の字の前後ハ嫌ひとなし当時
に可隔 夢見ハ二句隔べし
▲夢ミる 現(ウツヽ) 幻(マボロシ) 是非皆二句也
▲夢の覚(サメ)は二 寐(ネ)も二句也 但夢に隔
然れど夢ながら 覚るゝ二句の能也
酒の醒(サメ)るにも可隔
▲夢を壁(カベ)と云 夢ハぬる時見るべし
▲夢現(ユメウツヽ) 壁(カベ)もぬるゆかれバかくやあり
続(ツヾ)と大夢に現(ウツヽ)を結びても 非に夢に
▲夢の世の類 非に非ども といふべし 此夢の外ハ句
○夢かくまじり間(アイ)の類也 奥 非に句数ハ
文章(カン)の表ハ夢の中 又ハ 是非によるへ
夢ぢうりなど云くも非に非ど
▲ゆめゆく と云詞に 夢二句隔 前(マヘ)の字をし
わざるく 夢非どもし 非に非ど
▲夢見たるらし 夢見る文にあれぬとある也

▲蓑乃くち　すしかめの花と云るよし
○案ずに蓑乃哀知らざるゆゑ聖に遊ぶるゝの緒
程にまぶりしるゝゆゑ時ハ蓑服のやうくまどゝ
また治ふるゝのの若きにて皆程とひろくせ
結ふとしての文様衣の極もけさハ例多しぬ
くちかけてしろくかりに衣のうゐなるべし
○是ハ皆衣のくちぬ流れて賞ハ有らく　へハかつてす　桜京桃
○これハ称蓑乃底部もかゝる衣の類も雲の類も
石斎ハ蝶々蓑兎雪山乃神女がるよし
神女がるゝ成ハ豹丸や衣々乃角とゝ上
文ハ雲とゝかりぬと知る大云文ハかゝると
乃雲かゝる乃角成ハ蓑乃名称と
とかられ神女がるゝとせる羽し
○昔乃蓑乃彌色こし　と云句に
○豹の波雲ある山乃旅乃頼枕　宗祇
▲蓑にかゝせ　煮乃頼らにかゝるやとさび
にかゝ蓑にかゝくられすと云ゆゑとて
○これはやたれかるゝ年の蓑に名とそ気別　定家
○又かふとと紋に社これ　と云句に
○よしや人蓑にかゝせたれのまゞね　宗祇

▲蓑乃浅増　雌の名ハ只蓑乃つるよし
▲蓑人　雌ハ人ハ人乃字に文句を云人備し　称狄
▲蓑蓑く麻　若蓑く麻を云　麻乃蓑合とえるよし
▲蓑　栗数雲蓑ハ浜乃底くしと　定家
○月清と称す衣紋と庵の東衣蓑と思ふところ
▲弓　つし　矢打撞ふ弓張月と打撞
矢なに矢二句撞弁乃矢部ともとさし
▲弓張月に　矢乃奉乃矢乃弓術追にも二句を
太矢統ニ弓ニ矢二句とをハ弓張弓乃彌かゝり可撞し
▲弓場始　十月又月　諸家本も式日とこそ
▲ゆい　又ゆひの結乃字とくに思と
植る所くらびのに庭会て植る人とゆひと云
○植る由ハ十代のりとかとちへゆひも庭などの苗かな
○出乃ゆひもる人や家々んの田はかの苗に余りきをぞ

○

女

▲名称　雌の名所に　名所とハ雅と天照神
天満神かゞし候へ俳諧乃神の雪の

鉾といふハ名所にして其下も名所にし
表筒男中筒男底筒男命を祭
されバ名所に替し名所に非と旅行可渡
し 名は伊勢乃鉾にも多く有す

▲名所に　国乃名二句隔　名所とく
三句去べし　名所に唐(モロコシ)乃名所に越路(コシヂ)筑紫(ツクシ)大和(ヤマトガタ)が
と二句し　唐乃名所にも和歌乃浦名所も二句し

▲名所に　数(ミヰデ)乃名所も付句も折数も可随
然もくるしからず

▲名所に　花(アヤ)織ぐ二し　但し折嫌べし
▲名所　二清(セ)ぐるて三句めに東(アヅマ)乃形容着
と類(タグヒ)物に是文付句中も去し
○舟乃沖乃浦に湊迄く
○名所に寄見る月秋し乃枕
明(アカシ)乃まや是河あかまらさ
▲名所乃句　同低くいけてハせずす中に只
乃句まざくよろし
▲名所乃極楽乃るす　別して味しりに頃

▲名木乃萩　秋し
▲名草の花し　名とし　無名乃草の花は雑
▲月　乃字　二去べし　月花ろ、来月
かくれ新し　○月並二　月乃字つてゝ折外
其乃其折々く去べし又はじめと
折嫌し　残(ナゴリ)続月　とまく
▲月花を　かはらぬ花乃付くとかぎらず
よ来月く花乃ハ二句隔し
▲月花し草　植物と并など
▲月松(メチ)　月無かし　めぐりかはらぬ花とよまり
○月しかる柳乃又見られて縫(モズ)乃葉ぐさ竹かはらぬ花の欲
○行秋乃めぐりかはら山のかし
▲月満る　光(クワウキ)殿乃分く色かも　懐(と)折嫌へ
嫌し
▲月くらせ　月とく見合月も定しまるし
くらし　月合(ナカハセ)月(日)加　晦(日)乃字し　晦(ニゴリ)ハよみだらくゝとむ
▲月もあやふ　一入ハ月らくまるしよめるる
詞し文めかれぬ事しきそども云月もあ
やしといふらし若衆其沢遊ずるべき詞し

▲めもさるれ　月も遥(ハルカ)し遠(トホ)く見渡しる
ハし又草木乃芽(メ)乃さるゝとも云　○異本ニ
目もさるれ郷と云句ニ嫌し　杏納句ニ作りるべし
▲目かれせず　不関離(メカレ)つゝ　目をそらさず
嬉さるゝし　めかれめるく　あかられ　月ふ見あくべし
▲めあくふ　見あかくふし
▲めげる　めそく　あだと云類く二季ナベし
▲めげるゝ　月乃字見乃字一切ふ嫌し
めづるゝハ嬉(テイ)さるゝし　月をめで花をめでかくまぎらかし
▲めげるゝ　見あるゝぬふ隔て　流句体ニ
▲めぐる　めぐり　あたらと云類ぞ二季ナベし
○一季ニ時雨あられめぐるやく　盃廻(サカツキマハリ)
らすんハ句ニ嫌ハし　植えべく花も見べし
▲女(メ)　二雅ナベし　洗女(ワカメ)　織女(シヅノメ)あられ雑し
▲乳母(メノト)　人乃字ふ嫌
▲めざし　女蕃(メサン)と云　織女(シヅメ)乃るもし　又
あもれいさらるる時物をへたく　見ともめざしと云
○折川の橋瓦　結方　[illegible]

○とまるざ旅立かし　破業植へめさし花ねかし沖ふおれ[illegible]
▲めげらしき　つし
▲和布(メ)刈(カリ)　夜し　若和布(ワカメ)刈(カル)ハ春し
○異本ニ　若和布(ワカメ)刈(カル)も夜としよくし　○和三冬ニ
和布(メ)　雑し　刈(カル)冬し　若和布(ワカメ)　春し　刈夏ト
▲めかう蜻(カハヅ)　春し　六雅と奇ニ　光俊
○錘(ツム)を絲もせで夜ともるとむふめかう鱸乃ふ句見をえ
▲めく　と云詞　雑し　春めく　冬めく　時
めく　哀れめく　時雨めく　あたれ雑し
▲めまそ　第ナハ二ナるべし
▲める　めり　乃詞　数々云雑とつこし　中ニテ
二句去し　是と云句と見べし　○異本ニ　めく
めり　めや　此乃二句去　類ニ六　二季としと云
▲めや　と云詞　さらぶれふ花もれ嫌ハに雑し
面八句乃内ふ以定　○異本ニ類ニ八二季と云　去二源すかよう
▲めあり　雑し
▲石乃字　てし　緑石(アカウメ)ふる　瑪瑙(ツカウメ)もあり
まぎるかとし　雑可嫌し

○美

▲みとし路 神田也 御田ミトシロと云 或ハアレヒ
社壇シャダンの内なと御戸ミト帳チャウなとゝ也 ゑらしろと

▲緑ミドリ 二句し 草木の名ニ一 空ソラ水ミヅ袖ソデ

かざれ名ニ一ツゞ二し 緑の洞ホラ二の内ニ
若緑ミトリコハ虫し 又云 青柳アヲヤギの緑ミドリとなれハ
しかるべし ○只なと木の名れも物種と

▲緑 と 草 二句也

▲緑立ミドリタツ松 若緑ワカミドリ 篇ハ春し 只松乃
緑ハ雑し

▲緑の洞ホラ 仙ス二山数ニ洞トウおくも仙境センキャウ
の事也 又ハ山数二句とも

▲緑の空 碧ヘキ天テン也

▲緑の林ハヤシ 又ハ白浪シラナミと云ハ盗ヌス人の事也

▲若緑子ミドリコ 七歳まで云 緑の如きと

▲道乃字 同字なし 数多ても嫌

此乃字嫌ふく二句べし

▲道ミチと路チの儀ハ或ハ二句也 或ハ二句し
これらの字と此らの字の差別しるしへば
彼字の名ニ成 道の字ハ二句し 山路
海路かれ名ニ成 此の字の名ハ春旅
無路山路海路ハ三二句し
叙ハ此の字乃名とあり 路ニ道ミチの字も嫌様同前 又の名の云のとか
山程有る二道別ベツして路の事ハ嫌し

▲道二 枝折シヲリ 踏フミ分 迷マヨヒ路ホコ 又二二百

▲道に 香ナ御サツ地 苔コケ路ナ 木に嫌し

▲道二 ちらのく 二句也

▲道の 打越ニ 梯カケハシ 橋ハシ抔ハ気味悪し
又中途チウテと云 夜の字同嫌し

▲道乃毛 道の物のし 経ユキカタ過乃よけ

▲道ひ きんし 道乃せがれ人もるべし

▲道行ぶり 道の次ツイデ也し 彼の事と云 物の次也し

○去れハ為物なし 四季の道の物にも言ナる事も嫌ふし
○年の如よ道の物なり乃一句ゟと云也二

○のくぼよりとぞ道の又ぬれ 宗祇

▲見(ミル)乃字　同字嫌し　見るは面嫌
▲見に　見ふとものみれが付し
▲見と　打渡と二句し　但し指打渡す　なれども嫌し
▲見と　試(コヽロミル)顧(カヘリミル)眺(ナガメ)見合(カヽ)　何も二句嫌
▲見しかくれ　隠と面嫌
▲見なくさ　見乃字二句嫌　醜(ミニクキ)の字も
▲見すれ　鏡(ミモノ)乃字し　後見なとも
▲見渡せか　鷗ても只二句し　鷗見　同おなし
▲見渡せかとも　所(キ)残(ル)し見に渡して二句と数　鋼し句乃中にても不嫌鋼し　打見渡しも同前
▲見しく渡り　たわしき鋼し
▲見せぞやか　此類高にかかし
○男ふしめて誰人乃つれかな　と云句く
○見せぞや乃花乃色かも名にて　此
○見せぞや花もうつろへる中　此句は中乃字別く句嫌し
○見せぞや乃花も今さき河乃ひて
▲見ゆ留り　当時不嫌し
▲見て留り　打留て二し　手白かどまで一句なきら　○見かに

▲見して　中して　入て　かどれ　見て二句嫌とく
▲見とまり　二句去し
▲見乃月　つし　又旅乃月ある、し
▲見なれぬ浦　旅し　見なれぬ山　同お
▲海松(ミル)　一順再遍に無用し　▲海松は夜し
　植物し　見ゆし　見るめかれのかごく
　同おし　和布(メ)に只句し　うかめかるかど
　乃めし　見るめかるかごく　去くつ別(ベツ)に
　和布(メ)は去まし去し
▲見苔(ミヽヅ)に　滋さに嫌と見え二句乃　気ある
▲乱(ミダル)、乃字　植物く　字外も去べくさうを
　て四植物く二し　是に治定のまた文か
　乱の字不恕く二し　乃心当時は打捨く、いわく云く
▲霰(ミゾレ)　つし　折し夜に只句　雪に面嫌　雨と云
▲見ならう　忘(ミワス)し　いまうし
▲みの字取　結(ムス)ぶと　渡(ワタ)と云外去へし
　とふ結べし　多結ぶみくむと同じやう
　水ままで去し　閼伽(アカ)結ぶ　多渡(ワタ)りぐく

聞て涼し 清水結ぶなどゝ水くむ
氷仍沈 又水むすぶハ雑也
▲水ニ 閼伽(アカ) 勿ハ夏也 あらひ水乃荒儀と大水乃荒字二也
▲水ニ 水底(ミナソコ) 水上つ分がら之字又句也
▲水ニ ミくさ ミのくれ ミなわ
▲水ニ 形ど皆又句嫌し 皆水乃字也
▲水ニ 汀(ミギハ) 源(ミナモト) 二句嫌 鍛冶(カケヒ) 渡之
▲水乃流れ とかく流れ乃水うかせど
▲水のおも 涼し 清水のおもも同じ
▲水乃纓 ろく 川(カハツヒ)涼 流れ乃どの 付も秋し
▲水茎(ミヅグキ) ろく 筆紙の水茎の跡 又ハ水辺
▲水茎(グキ)ニ 筆 紙 書く 又ハ水辺し 他し
先ニ 気がつかバ縁がらふ若 所也
▲水茎乃跡 水鳥て 山鳥し 江列の名所也
○只かニ水鳥ニ浪どとらく
▲水堰(ミツセキ) 水くく洞(ナニガ)せく 所也
▲水鳥 て秋用乃分し つるるく浮寝(ウキネ)
乃鳥られかし ▲水鳥 夜也し 勝つハ

涼し 巣(ス)ハ夏し 鳥乃巣れ巣乃ハ春し
○只かニ水鳥の巣ハつりとえる深山ふ水鳥の巣ハ秋也
▲水海(ミヅウミ) 湖(ウミ) と并ハ非ニ嫌ニ 鳥乃海ニし
ての名有し 江列ふ限也し 水海ニ并ハ 江列ニ而限とく
▲水乃ミなと 水乃みなとくし 鯰(ニワリ)の字し
▲水口(ミナクチ) 涼し 田也結く也べし
能くハ夏用し 苗代(ナハシロ)乃内也
▲水口 水上 水鳥ふ秋用の外と 秋
▲水無月 水乃字 無乃字 二句し
閏月(ミナヅキ) 熱月(ミナツキ) と書夏し 水無月を月とす 是ハ又句也
▲水無瀬(ミナセ) 水ハも無ふ色又句嫌
瀬ニ面嫌し 又云水無瀬と杪ハ 非ハ乃也
▲水無瀬川 山城国 山崎し
○摂津ハ山ふ霞むミなせ川 又ハ秋と河ふ成ねせん
▲ミなの川 常陸国乃名所し
▲水上ニ ミくと云 網(アミ)二句し
▲ミなハ 水乃泡し
▲ミなれ棹(サホ) 舟さす棹乃水ふ馴れさる

みし　添ふなれ　筆し　又見訓けらくみよあり　雲乃こ切とよあり

▲みを尾（ミヲ）ニ　みを標し　つくし　いづれも同じく

▲澪漂（ミヲツクシ）　又みをつくし　いづれも同じく

てふいはれず　○見ちに兵あ付とく

（径二）ふねのかよひしるべに海に志るしを立て船

乃通路標識（ツウゲンヒシン）を志る標しくもり

▲みをさ乃巻し　▲みをわ　あゝし

▲みをげ　みの屑（クヅ）し　▲みをけ草　雑し

▲見をきまさる　とも白　一向二ありむかくて玄々し

▲見らも　みの薦（コモ）し　みて又白し

▲みをわ　みのとかさるし

○人鴨ふ知せとし許偲れ添（ス）のとこあり雲や清らん

▲みしぶ　みの澁（シブ）し　さびたるなし

▲三乃緒（ハシゴ）　見ゑとぞ去　年月日見三乃志をめく玄乗し

▲三笠驚　三株（ツムギ）思偲し　さゝゐき

乃三笠思慕とよめり　三枝（サキクサ）とか枝（ヒワタ）し

枝皮なく葺（フキ）たる所殿乃るし

▲三角（ツノ）柏（カシハ）　又みつの柏たる。　日本紀二八　三ツノ柏緑

柏（カシハ）建延喜式六　三綱柏（ツノカシハ）　國史　八二角柏（ツノ）く

みつの三角柏とは三葉ある柏し　延喜式云

三葉ふ柏ふ神供（ジンギ）を酒（ソナ）へ見をらくら十見

是をかけて之れかみをくさるをかねし杯

之時の見を見く神ふつくさて侍るし

○神衆や三角柏ふ子向て是をま神ふつくさぞろ　侵報

○膳のまかなひのひとつ仮の所ふさしるへ（見ハしとくまり）て柏古ゑしれ　嫐脱

又みの柏と云柏を見てみの小流ふかれ流む

いかなふうくいにあふらかがねく

○思鉤の南乃柏ふ向ふみの沈む沈ハ深うし多り　小侍

▲三乃車（クルマ）　法華乃譬（タトヘ）し　一三羊車（ヨウシヤ）　是を

梵字の喩ふ云ふ　二　鹿車（ロク）　是を縁覚喩ふ云ふ

三　牛車（キウ）　是を菩薩に喩ふ　是を道と法

乃大小様ふとり　又法華経二の巻ニ三車

火宅（クワタク）乃譬（タトヘ）とて家ニ三乃車乃よミと大白牛

車乃譬（タトヘ）を引て大小乃機縁を教（サイ）度せむ

是を開三顕一とて法華乃譬（タトヘ）をあらはせるところへし

○惟の又はひ乃遠せ出らん

○あり明き月に車やる哉　雑
○牛乃力も我は独まん　雑
○立添きてふと麻の車かな　雑

▲三乃車　三乃道　三乃世　背ハ大哉し

六三乃瀧(ミニタ)　三乃乃　古語附て可然し

▲三瀬(セ)川　述懐　哀傷し　無常　二六

▲三冬尽　冬ハ冬季也とて也無し

▲三日月　秋なし　此外は仏数(ス)に入れ
似し日次乃月は二句し　○実なきて　日に懐し
其夜々々三日月なくは又秀季に
月無き折乃有明はあるし　其有りて済
又云ふ眺め乃入ハ秋なる二他ども

▲三輪(ワ)　杉結(スギムスビ)ても此二山(ス)類二条　四月上卯日
大神祭とさし

▲三輪が崎　名所也し　此二山(ス)類二　○実木二
三輪乃湖りは名所二て他ども

▲三穂江　猗列のは名所し　真列(ヅレウ)の

乃は名所二他ども　山類二他ども

▲三鴻(ヒ)鞆(ノ)　越中し　二上山乃名所し

▲三越路(コシヂ)　越路ども　山類にあらず
名所にも他ども　似て三越と云ては名所に
新越可は猶有て越路は名所　三越路二而乃字名所

▲三保(ホ)乃松原　名所し　駿河列し

▲三井寺　名所し　山類に他ども

▲三熊(クマ)野　三芳(ヨシ)野　三ず(キ)の流のなき
二句振と道也ら　似て三寸は他二躰

▲三種(クサ)乃宝(タカラ)　三種乃神器(ジンギ)神事八
一　八坂瓊曲玉　宝剣(ホウケン)ハ天村雲草薙剣　内侍所(ナイシ)八咫鏡
○神代から三種乃宝伝りて此御代乃宝とそ

▲三ツ輪(ワ)ぐむ　其乃髪がまわすら轢し

▲三ツ千(ミツチ)　四ツ千(ヨツチ)　人乃髪(カミ)乃ね(ヒト)に有るは年の
字こ二句し　負(カズ)乃字て有るは年の字
曲篇年計りぬ十二千三千四千なども
え〜とは亀(キ)こよそ也やなど
まし古今序こ〜一句しと書る

はるかなとゝても年乃字ゝゐ遠文
字乃数(カズ)ゐめぐらし年ゐあるべからず
とまれ所ふれいまだなしとゝとあり

▲瑞籬(ミヅガキ) 冬ゝゐ雑 恒ニ有し

▲美豆野(ミヅノ) 冬ゝ色ゝ晩ど

▲三子(ミコ)参り 百敷ゝ異ニし 宮乃参り有し
二の宮し 太子(タイシ)根有し 山乃端(ハ)岳(ダケ)
尾上(ヲノヘ)の面し ○美女ニ出ゐ有し 又[illegible]山

▲南(ミナミ) ニ 面し 又名所乃参りとゝも二の国し とく
紫宸殿(シシンデン)付ゐたりハ南殿(ナンデン)而してし

▲南祭(ミナミマツリ) 喜し 三月辰日 八幡(ハタ)臨時(リンジ)祭(マツリ)し

▲南乃風 名所と[illegible]雑 三月中午日未子乃まつれあり
南(モロコシ)乃人我(ワガ)家(ヤ)を御門(ミカド)おとされ
て行時ゐ常を取見ゐやゝく云南風(ナンプウ)
吹ん時我(ワガ)琴(キン)嵐(ラン)ゐ妙ゐ[illegible]べしとあり
○夏乃くる南乃風やゐゐるらん
○かゝれ常乃帯(ヲビ)乃経(ミチ)我(カヨ)乃[illegible]

▲湊(ミナト) 二し 冬ゐ雑 夏乃湊(ミナト) 秋の湊 宗作

あき色ニ晩ど湊(ミナト)二乃部ゐあるべき事時
ゐ用べし 例後○美女 湊二ハ名所ニ出ゝ[illegible]

▲湊舟 緒ゝ晩ど

▲巳乃日乃祓(ハラヘ) 雄略(ユウリャク)天皇ニ始る 三月上巳し

▲蓑虫(ミノムシ) 鳴声(ナクコヱ)などか加くも又異ニても
秋し 又云 蓑虫(ミノ)ゝ有付くよし
○美女ニ蓑虫ゝ声(コヱ)鳴(ナク)鳴くハ秋ゐ智し
[illegible]子句ゐれ声ゆ鳴見句くて秋
ゐせられし 所ニ [illegible]乃ちりゐかゝ家
見虫とく定家卿乃所ゝ喜ゐあるとまく

▲蓑(ミノ) ゝ 笠(カサ)二句 [illegible]も二句 [illegible]蓑ハ面し

▲蓑笠(ミノカサ) 夫ニ[illegible]ゝ付ど作し笠まれ
ゐ[illegible]句ゝ候べし 笠(カサ)取(トリ)山面し ○美女
世蓑笠(ミノカサ)[illegible]ニ二句 作し笠ニ三笠山 面遠と
蓑ニ田ゐ[illegible]鳴 [illegible]

▲宮 四し 御殿 [illegible]皇居(クワウキヨ)名二作し一ハ
名所ゝるべし 制式乃羽し 此外ハ神(?)殿の
美一名所乃神殿乃美一 皇居の美
一名所乃皇居乃美一 外上四し [illegible]

神祇皇居各二句去る嫌し去字也
ゆへ也し一書に高(タカ)殿(ドノ)乃宮ハ皇居しるく
▲宮ニ 古里 大宮なとハ嫌ふべし
神祇なとハさらぬも嫌べからず
▲宮ニ 宮仕へ二句し 宮(ツカサ)中也 都中也とも
▲宮仕へに 宮 嫌し 都 嫌也
▲宮仕へ二 鏡 嫌ふ一つ歌と 一道也まで
宮心ハ不嫌とよめし 宮城
▲宮居ニ 居乃字 折嫌し
▲宮城(ミヤギ)野ノニ 葛(カヅラキ)城嫌し 宮嫌し 宮二都も 嫌しとき
▲宮城野二 萩(ハギ)付てよし 萩(ハギ)ニ宮城野 遠
▲宮城野乃 萩生にとれ 萩(ハギ) 嫌ふべし
▲都 二し 公家ニ 鄙(ヒナ)乃 都嫌ふべし
○宮なとニ 都 只一 座ニ二 一句ニ 一折式羽
此上三し 月乃都 旅乃都も三の 過と とき
▲都ニ 皇居乃宮 大宮 九重 雲の上
雲居乃庭 百敷 不嫌 神祇の 宮は 嫌し
▲都 旅(タビ)路乃 都中も 宮 嫌し 蓬生乃

宮なども 折嫌し 神祇乃宮ハ 嫌の也し
是ものゝしと 琢篁ニ 在と
▲都 九重 百敷なとハ 大内 付なるまず
▲都 古里乃なり 旅乃都と 旅の古里
ハ 折嫌し 居都と 旅乃古里ハ嫌し
居都ニ 皇(キヨト)居乃古里も 嫌し 旅の都ニ
皇居乃古里も 嫌し ○宮なとニ 都と
古里なとの 嫌 但し 皇居乃古里ハ 嫌
同 都考ニ 古見さくの古里乃 嫌不同なるへし 旅乃古里ハ 都ニ 嫌べしときく
▲都ニ 田舎(イナカ) 付のるも 嫌べし ○宮なとて
都ニ 田舎 付ざる物しとあり
▲都ニ 都鳥も 折嫌し
▲都の 錦ニ 名所 不嫌し
▲都鳥 名所 九重 雲居
乃庭など 嫌し
▲深(ミヤマ)山ニ 深(フカキ) 袋(フクロ) 二句嫌 古く 嫌も 同じ
▲宮びり 宮びやかと 出の 艶(エン)乃字し
宮しき 神 なるべし ○又ハ 宮こひると

ゑなき迄しべし又ゝみやびし大なり
▲みやび　雅（ナマケ）し　源氏の葉に此家乃
いとほう乃みやびなくらくのひ給ふへく
とり給ふなと云心なるべし
▲みしぐら
▲御簾（ミス）　籬（ミヅ）れなども　只都（ヘイ）帥（ミテグラ）し御の字とも云是
人乃部をとるといふ部也の
▲御簾（ミス）　簾（ミス）ゐしてと云ふ雲の補（ヘン）し
▲御帳（ミチヤウ）　御帳たか　衣僧し　天子の
▲御座（ミキリ）　御座所とも御帳とも云　御の字なくてもくとくとよめり
居所二二句　神前の如し
▲御庭二　庭部に嫌し
▲御狩乃游（タキ）　船（フス）二山（スス）数（二）組し二句嫌　御狩乃山
同おし又組し秋ゐ御狩乃山ハ庭ゐ也
▲汀（ミギハ）とき山し山部し
只と居所と嫌へし
又二句　渚（カギリ）二句し○又外二汀てし
▲御とも　御供（キ）二句嫌とも
▲御と御（オ）　面嫌し　御座（オマシ）と御階（ミハシ）部ぐ

乃部しみとみおとおと大部は嫌し
▲帝
▲帝　勅（ミコトノリ）　御門　門と同じ
二句し　御子（ミコ）　三木（ミキ）二　御乃字の替ゆるも　右體二三木二ハ御の字なし　體に心得べし
▲御代　世乃字も嫌　大方代乃字也
▲御幸（ミユキ）　藐（ハコ）姑射（ヤ）二　御幸（ミユキ）　仙洞二　御幸
も御乃字し　御幸二　部二句　御幸の
字なれハ御中もおふも面嫌　御幸（ミユキ）の字
なれば御まれ部　おまへハ面し
▲御階（ミハシ）　紫宸殿（スイ）所二　禁中も社頭も立
▲御調物（ミツキモノ）　又御貢（ツキ）物　御乃字此句可嫌
▲御綱代（ミアジロ）　琴（コト）笛（フエ）寄ぐふ嫌し同し
▲御垣（ミカキ）
所ハ付べしかと同所ハ紫宸殿（ス）極（二）　是ハ対（トシ）下
▲御薪（カマギ）
薪を大内へとるなし　正月十五日一百家並く
○百官の百乃御薪ふ民乃かまど　是でよ同前ふ　おきるとしとし　煙ハふかり
▲御溝（ミカハ）　禁中乃芥（アクタ）川し
▲御垣（ミカキ）寺　之等ハ柿かく部の事ばをとら

宿直（トノヰ）ちとも事なし
▲御垣（ミカキ）が原　北ニ居所ニ禁中乃御垣し五月三日
▲御燈（ミトモシビ）　禁中にぞ供し奉る
天子北斗（ホクト）乃星（ホシ）を奉らせ給ふ也
乃御燈先しくより秋し参（ミ）にかゞる
秋乃燈　あかゞく奇によめり
▲御簾乃葵（ミスノアフヒ）　加茂乃祭乃日は牛車家
乃御簾（ス）まで見れに葵葛（アフヒカヅラ）をかくるし
○まとむ葵簾のこと葵まで見え文にも見ゆるを入て　采雅
○かく見えてのおしる月の秋に見ゆ葵乃かれまでし成り　周防内侍
▲御祓（ミソギ）
六月晦日し
しろ奇て六月の内なく日ハ何にても　されば夜月せよと
○かも川乃ぬの座流く涼風や秋てらしや　麦秋とる
夏乃鵜に小鵜（ゴジヤキサバ）と集て人を祓（ワツラハ）しを稀一秋し
▲御禊（ミソギ）ものの背乃手にし夏し神猿し
▲御祓に神（ハラフ）にあり但しそれへ 祓へし
とくても神乃字二つ生し 巳の日れ祓
荒し　仮乃祓　秋し　九月十六日　源じふるく秋まもの御祓

▲御祓川（ミソト）　北ニ居所二見とそそぎて　御手洗川
▲御手洗川（ミタラシ）　鴨川（入ル）御禊（ミソギ）川しよ集（カ）
花乃神山より出て下鴨へ来乃森乃
内を流れ出る川をせとの小川と云
○夏せしと御手洗川にせし御禊神へ夏をぞ祓ふもののか
▲御裳濯川（ミモスソ）　伊勢乃五十鈴川し
▲御田屋守　神田をもる者なし
▲御琴（ミコト）を　神（ニ）に琴（コト）を奏す時　神乃字二又子もにも音
▲御薪（ミカマキ）　吉野し　御垣（カキ）原　薮代乃御垣
▲御空（ミソラ）　越（コシ）乃御空（ミソラ）に背流乃字云し　御二打覆　禅統
▲御室（ミムロ）　御室し　云う流乃御室にハ居所なり
▲御射山祭（ミサヤマ）　秋し　七月廿七日　御射山鶴も
御射し標屋（ホ）作りも　御祭ニ頼りの座し　大二秋のり
▲耳敏川（ミトガハ）　涼場（ミヤヤ）二条乃高丈友乃西
神泉苑（シンセンヱン）乃流より流れ出る川し
○六月や耳と川やく流れて行る手や水神らへ鈴んん
▲身にしむ　て　秋し　もの秋し　なりしまの身にしむ
○の美しく身にしむ二　それるの秋（キ）に味（ミ）のや

としの袖乃香花の香と付合ときし
去むくら川乃香嗅しとまく
▲あきの雨　香し　香ひよそにもれ見えぬ匂ひ
▲あかおかの　あかね紅葉せぬし　あかね匂ひよれ紅葉し
▲あへかねて　迷惑し
▲あ乃花やかなり　と云詞雑し　俳し句雑二後べし
▲あをなの夜　洞二二句　雨ニ雨隔
○つくし火ハ牧かあをや雪よかやさかぶれせよ
○こかれもやらぬ泳ありうつ　と云句ニ
○へやの椎と秀やしる夜の夕暮か
▲あふかの河ぎ　労し　あ乃ゆき河かれきし
　又夫乃推やゆゑきと云　例てあかの河ニ云
　いろもそうすべよあり
▲鐘(ニシカキ)　てし　るへふ雑く　絡迄て又もあ
　べし○実なニ鐘　地勢て二何ほとまし
▲鐘日　眺望ニ雑し　蓍　付句可隔
▲鐘衆　色く明やまれ又ゑべし
　花ニ表し
▲とじ　蓍(トヲ)ニ　紀(キカ)もれニ二句隔し

○ し

▲代(シロ)乃字　月代かれ代わし　苗代あし
▲推(スイ)　推ハ紅葉せぬ物し　秋し
　実ハ加減　秋し　それ成つ迄か所也歳奇
○実(じ)き便かれ加ハ木の下に推を指て世を渡つ分
▲推柴(スイレバ)　秋し　眺ニ雑迄雑ニ　雑句乃心
　かしも合(フクミ)くハ二句し○実か之元来雑句
　か二句隔　柴(レバ)乃字ある様しとまく
▲推柴(スイレバ)乃種　服(フクスイ)雑し　迷惑し　秋ニ眺ヲ
　思ひさかるごとし
○推柴乃表けき袖ハ七夕のかさねか付し夜でまかるく
○是かぶれをとるか秋の夜ハ家へや云つ推柴の袖
▲推柴の山　紅葉せぬ山し
▲柴(レバ)　一文居ニ柴乃庵　柴乃戸
　柴橋乃内一ゆとましし
▲柴(シバ)と　芝(ミバ)の付句もゑ隔し
▲柴ニ　樵(キコリ)夫　薪(タキギ)　荒(シヲキ)木　み句隔　二句夜去
　て何河宜

▲柴ニ焼 煙にも似し 柴ハ焼なる事と
船ど 柴乃庵 柴垣などハ見るあし
▲柴焼 なるく木乃葉焼なるべからば
空焼 焼香乃用ハなるべし
▲柴乃戸 なるく柴なるハつゝる柴橋
あじろなるべからば ○又ハと 柴乃戸
▲柴乃庵 船ニ逢焼ニ荒木 柱ねと船どと
▲柴採 同前など 船ニ柱ねニ薪 爪木
乃新西し 柴垣などハ新薪 爪木
付くも南者 ○又ハ二 葉柴らしても
▲柴車 柴も見く たびなく山乃人
又ハ柴乃あとよくとても 柱ねニ船どとき
よりまるがし 荻ぐし
▲芝生 柱ねし 柴と南種
▲芝くらゐ あれ出く云るし
○芹芝見ふりて鳴雉子立が春見てあるゝねなれ
▲しばし 二升なるべし
▲しばく 数見乃字し しげきあるし

▲鳴乃あをとあぐ鳥もあぐ鳴子あるとも
鳴ゝさハ志げく鳴なし あしくゝ乃みし
▲塩一 焼塩一 竈一鳴と三し 塩竈
藻塩乃煙 りしかくなむ 云ふく 塩木
背焼塩乃角し 塩三乃卵と藻塩草
ハ又あるべきし ○又か 塩屋 塩竈 塩
焼などと 稚有乃卵し 潮塩ハ有ぶ数しをと
▲塩と 干潟村塩 塩如くて乃あくと事もあるし
▲塩と 志かあく 二面塩 又かの塩
▲塩乃さす と 門さすも 又面塩
▲塩さゐトハ 塩乃満来る事を去
往こ 塩乃ミちの塩さゐしと云り
▲塩乃鳴トハ 満来るるし
▲塩干 かどれ干乃字二所ると
○かすとみて一塩干と一鳴と二しと云かの字二移る
▲塩干乃山 表隅し 生死乃二わきまえてし
▲塩木 積山 山高し 高急し 塩木の樹 相乃卵し
▲塩竈 尾和布て乃焼火の云ふ塩

秋冬 塩三ツ乃内 焼塩乃類し ○冬ならは二
▲居所乃塩竈といはれ多塩へし 冬より
火ハ付けし火ニ焼と塩焼し 塩竈
炭竈ハ焼と云ん事もあるへし
▲塩竈 あるとて炭竈あるへからず
▲塩焼ハ 人倫也 ▲塩釜ハ 居所ニ二句也
▲塩海 水辺也 付物にハ名所なし 湊川
湊川 沖津 沖川 なとく ハ付物也し
若乃浦乃名所か如くあれ 塩引 鮭ハ付物也へし
▲塩からぬ海 生死乃海也 是乃塩の内
なるへし 東ハ二 塩からぬ海ハ湖也 ときく
▲塩もからからぬ 春夏冬にも時日を知るのよし也
▲塩貝 生類也
▲しほかせ 夜分也 後水も尤も由し
▲しほうみ つし 塩中も潮もある由し
○夏秋二 塩ニしほかせハ二句也と云ニ 候す
▲しほ焼 焼し 夜分ニ嫌ス ○夏秋二 夜分もなし 有
▲しほく 雅し 鵆 非鳥と云

▲しほくみねふく 又 此も潮中も雅子
ほとれ兼ふつて 雅ふねかし男子と一家
緑閑 似られしと家旅行られしと
○物音にしほくみ漂て嫌子なき折ハ事情ハ句
▲しほとろりとろ 蠕蛇 又 雅乳 末乳と云
○秋冬にしほとろのハ雅々にて 刈萱
▲知乃字 句あし しほうさ 蛭
下 しほさ いさしほら紀
好し 二句去し
▲しほへ てし 揃青と云 しほらし
しほきさ 知乃字かく 皆二句去
▲しほら紀 しほらしと云ふへく ニ尤し 夏秋ニ
此外ニしほられや夜 二花かり
下二 それとれしほらし かとと云句
二句去し
▲下ニ とおつらし 面 猿へし
▲しほみ月 清して云 枕詞し
▲枝折 事ニ二句 挿頭ニ嫌ス 夏秋

枝ニ二句 折ニ折しとなく

▲麻一 麻子一 もとの一 桛

麻をさして かくれ一 此外ニ あさ一もとの
小麻など もなるべくハ 結び句ニ
麻なく 物しりしとハ 秋の部ニ 出し
中しかくされ 苧なども 振り分たる
各別し 麦なと 右部式乃 句ハ上同
きぬし 麻をさして かくれ 雑し

▲麻一ハ 秋し 麻子一ハ 春し もとの一ハ
秋し 桛 麻をさして 乃君ニ 一時と見え
麻子ニ 蒔 結くハ 世ねるし 所居
ど結びて 秋となるべき 桛も 秋しと云

▲麻ニ 田とある 付ていふ也 此句ハさとわかく云也

▲麻 なく 物しり 苧もとの 葉など
立入ても これ 秋なし 右二句

▲麻を刈 秋し

▲麻乃乱れ 秋し 鳥金も 同じ

▲麻乃車 生雑し 雑し 冬哉し

法華経 三乃車 乃 見し

▲麻乃葉 雑し 麦なと 秋なる 時ハ 大哉し
含包 桃と 麻野 蘭 乃 し 大

▲志賀 里 淡水と 桃ある 西江
別乃花 れ月 郡乃 名し 又 滋賀と云

▲志賀ニ 花乃賀 紅葉乃賀 なとの
賀 ふ寄 雑し 花 二句 雑 可随 ありや

▲志賀乃古郷 旧居し 去居ニ 二句也

▲志賀乃山越 雑し 雑し 作り 花
結くハ 旅ニ 桃など 此さしく 旅の 句乃 哉ニ 嫌

▲志賀乃一つ家 是ハ 名所し

▲志賀与 桃ッ山 桃ニ

▲志賀乃滋賀 雪乃 不定し

▲志賀楽里 山桃ほとへ なるべくし 又 旅と云
志がらき でも 旅ニ 桃など 里も 旅を まし

▲志がらきの鶴一 橋州 飾磨乃 名所し

▲志がらきトハ さしといふと云 物し

▲志がらき沢 三河 国し

▲下紅乃字 用し 折にてよぶべし
▲下に 志も 用捨し
▲下に くゞす 志らぐり 青ハ虚とき
▲下紐 志川む 蝦枝 山鳥 背二句嫌し
▲下 衣紐 秋らし
▲下乃帯 蜘蛛に 衣紐に 二句嫌て可
故兄 吐沃 右乃帯ハ蜘蛛衣紐 沈香 玉
あぢまく 香乃給し 君 高見 帯と 源し
紅葉 賀と 是○又あて 下乃帯ハ蜘蛛衣紐に ゆく
▲下乃志ひ 忠無し 下猪も同
▲下萌 喜し 懐猶と 打越嫌し
野山 原 墨 野ぶ 結くよべし○又あたに
懐猶と 二句嫌し 此下萌と外の句を
野乃草 野と結くなし 下萌乃外は ゆすとゆく
▲下草 下荻 此ハせど下乃字よし
まべし 折乃下荻 末く乃下草也
分別よべし 木乃下露 あぐく云 秋乃 ふりし
▲下枝 下乃字用し 沈二句嫌し 孫説

▲下もえぞふ 下ふ枕なかし 上
▲下乃句乃花 づけく二ハ用しるに上
乃句にふさく八嫌く二よし
▲下乃句のて句り高時百韻も亦二ハ
せず 同下乃句の下句り同じ
▲志でしき 一座に二て又志でしむハ嫌
▲志るふ 二て 此同一ハ座てよべし 孫云り
▲慕ふ 折に 云羽仙 墨く二句
▲志たがふ又志たひあぐく云輪て二よべし
▲志たさえ 茶嫌し 茶やに のひくよし
▲志川り 二て 経乃 用し 又云志川
けくてよふ用し○又なに 志川のし
も二乃同し 志川あらハ此外によぶき
うと云 風 定 此字也もよむ嫁かぬ
▲閑に 志りしき 付ろすめぐ 二句て嫌
催し句縦に 偽べし 孫説○又部ニハ二句く 史文
▲志川ふ あさ 静不あむし さぐしきて
▲雫 本乃雫 折乃雫 ありく

陰陽ニ依れど雲下ニハ居り苔(コケ)山など
続くまじし雲(ニジク)乃雲なども為すを入べく
まじく練りざれバ陰陽と云ふを句よ
結べし又州乃玉為ニ雲下ハ松も嫌徒
○又云　雲下ニ陰陽なくて嫌ふ(イヘ)ハ山岩
松苔などに斗し州乃雲ハ　陰陽なくて云／いずれすくなく

▲雲下　為くくりなと松鶴て為べし
高乃為くりなど松嫌べし

▲しづく石　浜藻(ハマモ)乃泪(ナミ)打際(キハ)ふ波ふきれ
てしづく泪隠(カク)れ川もと為し為鳥を続
くしづく月就しづく花乃色なとに続り
いづれもしづく隠(カク)川もと為継を為づくと続り
○居丸陥ふ為ど雲石(ヒツカ)かくよう記継の上る

▲泥(ヒツム)乃字　句鶴て二し　泥(ヒツム)ニ下枝(ソエ)二句に

▲綾(レウ)　二　人倫し二のか二しづく機帯(ハタオビ)も
されがし

▲綾ニ山綾(カツ)松垣(ツル)もすこし句きを

▲しづくき帯　綾(レウ)の機織時にて不遠
引　片結(カタムスビ)ひふまとふ帯し　別(ワカレ)のまれ

よふり威ハ級かくしくさ云又ハ雲云まへで
ひとへまうとゆへふひとへと云ふれあり
筋乃ふるかかり細ふ続く　こけやまと尾花と／ふくらり
○芦乃尾の綾様帯れ所結ひふ姿くと打さうる哉
○芦乃尾の綾　様帯れ状なる　とふ云ふ

▲絣乃とぐさ尾　綾乃うむ芦(ナ)乃続(ヘリ)し

▲白乃字　ふ鶴く二し

▲緋照(ヒテテル)や　緋照(ヒテテル)ハ為海乃熱居しさえ
と山乃かぐえへ不障さふり哉れ日和乃
さして照るとふしと共りかなく障(カタブク)景ゆく
あらむや為海乃為すハ不平照し

▲白乃字　しろ乃日　しろ日　ゆくとくし
しろくとしろくと雨し　しろもとくハ松／しろくとくも松
銀しろ乃きしろくしらハ為くみなさ凶

▲白幣(ヒテニキテ)　白木綿(ユフ)　白雲　差か尾しろくとく／松為べし
白雲ニ　白取かどれ　しろくとしろくとん／白雨べし
晴尾しろくと云ハ為く為もくしといハ為へくさ凶

▲白金(シロカカネ)　為し　○又ぞ二　日和の

又衰し衰残なくて白髪と斗もよる也

▲白髪（シラガ） 述懐と見なし 雨露とさく

▲しらむ 白乃字用し 秋なし

鶏明なし 暁闇（ゲウアン）乃段乃事し

▲白川乃関 山類し 能因法師二川の字

又句し 京乃白川も 能因法師二 嫌ひい

く 秋桑 京乃白川ハもとゞく繞つ山猿し居と かすむ絵やも山吹ら流るて川を何つ入き 白川とと云む細川しなゐかゝれつ橋と白川橋 とと云上ハかも川下ハ白川ともいふ

○能因乃哥と云ねば白川も名所へねれバ秋風ぞふく

▲白洲（シレウフ） ことりも名所也し 真砂（マサゴ）二雨絶

▲白尾乃鷲 春し 継尾（ツギヲ）同お露乃

霜虫らぐらと云 白鳥羽ふく 續（ツヅ）し

▲白鳥乃高飛田 生類し 足結んで 鶴

▲白樫（シラカシ）乃霜雪 夏し 只樫乃そ秋おも

冬し 而して常盤（トキハ）木乃霜雪ぞいれも

冬し 松乃霜雪ハ雑し

▲白波 盗人し 緑林白浪ハ盗人の名也 荘子二見え

▲人倫乃句 二句去し 又云人倫乃句

二句つゞきて二三句つゞくをいふ事 新式の定也

▲述懐 只衰乃句 一句去れ時ハ一人の前に

付ゞくをうし 述懐乃句ハ三句続くし

見なし 述懐と只衰続くハ只衰は斗り

知らし 紙ハある二句続びはる句なと云所ハ

述懐ちらしい只衰斗りし 新式の定

又云 述懐乃賀同類と結くハ忠斗 事く

述懐と懐旧と 新式ゆく

▲芝（シバ）乃字 同し 正月二ハ差し

▲芝草 秋し 芝と打越し 草花縁入て見し

▲芝摺（シバズリ） 衣裳（イシヤウ）乃色ゆく 秋し 植物と

芝と夜類し 芝乃字と打越し

▲芝乃庵（イホリ） 名所乃芝山なと云名所ハ 草木二三句と

隔（ヘダ）つゝ芝乃べつ浜波せし 芝乃やま

ども芝ノ勿ぞ同おも又山類と二句し

見なと 根芝（ネジバ）芝草（シバクサ）と秋し 名所と三句と

▲忍言（シノビゴト） 二ヽ むつましき付句に其趣を
忍し人目の関あらしといふ所 恋乃句なく
恋乃道 人に知られて わが思ふ 間
せきかね ちぎりし大かたに見えて 皆聞えし
▲忍車（シノビグルマ） 恋し
▲東雲（シノヽメ） 名時分に二句 夕時分に去嫌
笹にも月にも去嫌なし 折越に夕時分
いかで隔るべし ○異名に 秋なし
東雲（シノヽメ）と書しのゝめ 雲に去嫌なく
▲湿（シメ）（しめると云同） 物類くらし 猿乃衣に是れ
ゝ義乃気しれざる所を衣にやるべく
霞（カスミ）かゝる所は嫌ふべし
▲しめやかなる 冬し しげくなるべく去
風凪し 雲に 雨し 降物に二句し
▲しほれる風 しげく吹風し 笹に 水
植物に去嫌
▲しほれに植物 思ひ しげく植物し しめやか
衣もとる 忍ぶ 是嫌に去

▲篠（シノ） 草 三句 竹 笹 去 三句去
又同し ○異名に しの 篠 雨しとしく
▲しのゝめ 萩 草 秋し 小笹乃葉しとの
いかにもしげき草し
▲しの薄（スヽキ） 穂に出ぬ 露し ○異名に
秋し 節乃笹をも 其れに打越し
時節を見て 雨後しとくく
▲時雨（シグレ） 冬二 秋二 一所に二て
細き雨に 涧乃時雨川 しれ時雨 哥にし
二乃同し ○異名に 時雨に 時の字 一所 嫌ふべく
▲時雨に 雨 二 翠 秋し 霰も同
▲一時雨 一涧から どの かしら二し 一所に字をかくべし
▲時雨乃雨 冬一と 時雨 時雨に 雨に
又同し 夕立乃雨 同前
▲時分（ジブン） 日時分 又句 名時分二句去
▲鴫（シギ） 只一 居所に一所に二し 鴫の羽搔
八十（ザツ）鴫 ○異名に
鴫二乃外に 数鴫れ なる

鳰 六

川鳰もなるべしとなく

▲鳰　山類にも非ず水辺にも嫌ふし

○是なに似たり池の鳰は山類に二句へだつと

▲鳰の洲　又句去　両方共に洲は水辺と

例とる故に秋津洲に嫌ふ鳰の海は然し

▲鳰湖　山類にもなく水辺にもなし

名所にもなし

▲鳰守　山類にして水辺にあらざるはし

山近きなり共の鳰なくは水辺になるべくんば

▲鳰てれむと名目に池付なる中国もし使は

▲鳰摺る　鴫のなし　鴫とも云　植物なし

古禰にて鳰津るなど世がにつゞかわ

▲鳰氣　此なみ迄の様似な同し強

とは其雪にて面白く注まきかれで

又句外なり鳰草といは夜に月の変

なし真乃やうなり梅の夜に又句同

又句嫌なし　揃統　其類あれ

海邊乃物也　○是なに鳰氣の風物し

▲和ゲ　樹にある風とも　夜に西　植物に二句とまく

和ゲとは糸て　和毛一折し　草乃若

かるく草乃和らきなどなるべくんば

和りわけ林乃下蔭とふかふかどもなし

○是なに和毛に和毛にま方植物なれ

打落し形の和毛など西洋くなし

日又云和の字草木乃相に共てし又

▲和毛一引合く二てしと方心ねとる

▲和に夏山を同し　▲和に添付するのぐ

▲和草乃字　てし太陽の

又に幾など。是なに　▲和草に数々付けるす

付やうあまわくき味分別さへしとまく

▲和山　植物に二句し

▲よけを　雲山のおのまやくなつく

まとべし其のゆくとし藤のくなも同か

▲近年乃田老　植物なし又　錦色ある青き

此色鳰の時又月乃有世のゆくどとし

▲志て折　志けく折なし

▲しきみ　今は用ゆし　打捨し

○実ハ二　名ありて　清明にて　ありつゝあそと

いふ乃しるし　是は数の色　中の色二

色ありし　又同族しく　何事にも一ツ　成る

事ありて　要どれきると　いふ乃しるしあり

是は打捨し　そのこゝろにて　たとへ二

▲しきの　ちかく二　そのしとて　打捨し

紅葉しく　同族して　あらば　いかならん

どうして　数かぎりなくさんずして　打捨し

▲しきり　せて　せん　せて　せで　せそ

▲数（ニギ）あどの君　皆二色捨し　本乃人ハ今は用ゆ

乃ま　花しく　行しく　あどれ数に

て　百数は両しと　撰捨し　又ま花乃

葉しく　露しく　乃乃こと又一ツさ　然れば数

乃字にし　百数は咲しし　又備しき

数しきあどの色ハ二色し　○実かに

数乃字　打に　ならし　行しき　花しく

百数　並せしく乃数し　是ハ備しき

数しきあどうれ数は今捨てゝ　あく

▲数鳴（ニキニヒ）　鳴打し　数は色し　擬擬鳴とも

▲数鳴乃色　前に打し　行うまじと捨し

▲数濃美（ニキツノミヤ）　はや捨し　種吉乃事し

美打　数は色し　数濃乃杖　数濃

乃帝　数濃乃酒　数濃乃里　かくとも　書すし

▲鳴（レギ）　一　打し　成の物かあしとさま云

てとせまし　○実かに鳴　鳥の急に飛ど

一乃外　物備しきあど　隔し　鼓にてさ

▲橋（ニシキニ）　報し物ハ字二　色は備に　色は生ずに二句と

同切事をに　種捨し　又数し

橋（ニシキハシ）乃向乃色に行乃　然れに行いらぐ○実かに

▲橋（ツム）　又打らしても　捕捨し　縄ハ飛縄捕とも

▲志め縄（オホ）　回れ志め縄　雛とし　飛縄捕とも

▲志めて　とも云　てし　庵（イホ）志めてあびし

○実かに　鳴無しく　二ならべし　麻志めらく

志めさず　紙縄（リヤウ）とも云し　庵志めてハか

まへ並し　打捨しまく　志め中かも紙

しぐれし　但涅槃会と所なり
○秋葉二名あてしとハ秋葉ならず卜居して安住
とるらし見ゑ卜居なるかと説せるし
○名残の月の三有る枕かえも尾より時雨の降り作ふ
○桜かなせ更に名月の山の嵐かな　余枝

▲清水　離し　清水か下と書ても
水色乃用し　清み汲せく留ぐ嫌し
思ひ染き二二句隔し　○美かニ汲れ家ニ
紫ど又清水清ふこ納涼ふ付し　よく

▲清水ニ清き二句去し

▲清水なるくわ汲て水清さあり

▲清水かもと　又ハ山もとの事と五句去し
あらわ清らる二句隔し

▲しるり　清らくも清わてと二句去し
但しを春らぬしりしハ不嫌回済
まだ去りし　かお　嫌し　かし
まし　留どのしハし句りふ去嫌し
○美かニ太の前ニ　あつまし　去れし　付し
泣まし　涼し　庵し　付耗ハ句りを去ずし

又しぐれと云ハ句去りつゞし　かるし
かしこし　べし　句去れあし皆連ぬべてさるらく句去し
▲じと　濁りて只中ゆゑくも二句隔
句去りハ句隔し　ゆりど　あど　きらど
句ごれよつめし　様所ゞ嫌し
▲色事乃しとく　二句隔　尤し
歌し　色し　恋し　句ぞれ
教し　但ら色云の付色云とくのし
りど乃月二句去し
▲親王乃しこく　二句隔　并し
遊し　素陸　あつし　句と見れ
し　是らを句し尤去　向とハ親王乃事し　此親王とくの
しりし乃月二句隔し
▲色事と親王とハ付句も不嫌　但
料合とハ付句并に嫌とある
▲色事乃しりど去ていてと嫌るべし
親王乃しりど去てかてと不嫌し
親王乃しりどハ皆切字ニ句の嫌し

▲志ぐれ　無言(ムゴン)乃やうし上の志ぐれ

降く積まりし　樓遣(ロウ)と云志ぐれ

に添(タヨ)つくとあらく何ゆゑも斯(カク)降して

それより猶いかねし　降じまつむ哉

○霰の声まで志れねれん物のゆゑといふ哉れ

▲霜　露乃形の付らるす同気し

▲霰　二　露(スイナ)二萩(ハギ)萬(ワン)あゞ結へハ秋し

▲霰　二　雁(コギ)と結くも秋し

▲霜降(トク)る　あらく霜さ降るぞよべしと

出たる時をまじへし　霜れ消のれ

あらく霜乃消ゆれ打ほべし　ゆのじふ終し

▲霜さやく　風雅と二句嫌し

▲霜乃氷の流る　冬し

▲霰(レツ)降の　霜と付ども　たるまき

▲志も　ともゑにしてたる　二句嫌し　月かしも

さびしも　物しも　加じし　歎にしも

両句嫌し　さ　当りと同じ秋し

▲志もし結(ユフ)　志もとハまじと気の節し

くれへと云の物をこし　ゆくしぐれ

ゆふぐれさと滝何ぞ入なり　様(ヒト)と云

○照見の縁乃所やまゆるべき所山乃名川の名

○志まゆる当所山に依るべく　関東ハ見当る事

▲四知乃懼(オソレ)　是云ふの楊震(ヨウシン)と云人

王密(ミツ)と云人見乃為に金を献(サン)せ

くれあへく夜など誰も知れざけ共

右しかうぬるしといへ　爾楊震を

詞と聊しめく天知(テンチ)地知(チチ)汝知(ジチ)吾知(ゴチ)

何ぞ知られざらんと　謝くやといへれ翅し

○あれ夜ぞと人の見ぬて為ぬ道乃ことぞゆくべきこそあれ

○天乃志るさ何かくさらん

○思(オモフ)事の乃せも天地(テンチ)に知らせず　宗祇

▲七歩乃才　魏の文帝より一章を

東阿王曹植(ソウシヨク)を責(セメ)て七歩乃内に詩を作れ

作り得ずんば死に行はんと云ければ則

煮豆燃豆萁(マメヲニルニマメガラヲタク)　豆在釜中泣(マメハカマノナカニアリテナク)

本是同根生(モトコレオナジネヨリショウズ)　相煎何太急(アイニルコトナンゾハナハダキフナル)

臣の曹植し甚の文帝し釜中ニ泣ハ
萁様ニ然敷し同根の兄弟し相煎
ふれむ古の事をきし
○猶ととを他れゐうこしの人
○同し根ニ逢ふ枝乃あつらえて　糸紙
▲子期知音　伯牙断絃　子期と伯牙
朋友ふく伯牙よく琴を弾ど子期よく
これを知伯牙が心高き山ニ在時ハ釗
高山ニありと知流ニ在時ハ洌流
ありと知琴絃乃律調ニかなふ事
白目の彼より子期死して伯牙絃を断
て二度弾せど音を知ものなかりし知音の
二字これより起れりとぞや
○あれ乃人ぞれ今ハなかりき
○絃そもとや斷やぶ乃破りくと　糸紙
○琴今のまよし人いゆうず
○高山流ても乃ともまくり　糸紙

産衣　第六終

産衣　第七　恵比毛世寸

○恵

▲絃　二
▲絃　二　屏風付るし　あけ乃そかや　ハ同るし
書画ハ　よこ物ニ絃くとも
季なるべし　紬物ニ二句去を持のハ
ふ窓稿を絃ハ巻し　絵を云ハせし
▲絵嶋ゲ磯　所ふをくハ彼りていへ丈
清く波荒し　絃ニ高し　絵嶋ハ淡
路乃小乃海なし　浦古濱古云
○そての衛吹の丸湾ニ高作て家ゐろの蔵ニ月侭ゐる
▲江乃嶋ハ　琵琶ニ鳥　弁才天勧請の地也
▲糸ぐ摘　糸ぐハ芹し　糸ぐれの若菜
古云　糸摘し云術ニ云節ニ云ニ
○雪浦ハ糸ぐれの若紀摘ハ子摘し　此浪江乃字ニ出せり
○雲晴ハ糸乳の若菜し　摘ハ云ハ妓ハ三山への里
▲清士　人倫し　清士乃犠牲ハ森也

▲濱府 濱門乃府也 大江乃字にほふ
▲枝一 松が枝などにて以上二也
▲なまらひ なまとなくなし
▲えうしや 百韻に一也 大江に出ると
▲ゑびす 人倫也 夷國又巴の
ゑびす國などハ非人倫に 巴夷ハ蛮夷
為乃夷也 ゑびすといふハ非人倫 戎狄也
蛭子などハ蛭子なしが神祇なるべし
▲ゑひぞめ 紫乃初なくふかき紅なる
ひとえなし又俗に云紫乃藤さなしと云
▲ゑびかつら 女乃顔乃鬘なし ゑびかつら
▲ゑんじ葉がた 蒐乃ゑびなし又名布た
○徒然てゑ乃寂とさそれがあれ二方も行頻て

○ 比

▲緋乃なし 紅乃深きを緋と云 緋ならぬ服
▲廣乃字 物をなくこなし
▲廣葉に 庭二句也べし 廣おとい

非おとこ川乃廣おほいなり
▲廣瀬 夜なし 四月四日
▲廣沢 月付などと云ことあり
おほ沢に あらしなくず
▲廣葉乃阿り 流乃なし
○古畑の廣き葉穂まで あれもあらぬまでも さくとて
▲ひろき貝などに どしてハ生類名也
小二句也 貝なやに 貝乃ことハあしのさく
▲琵琶一 ひとく又琵琶なるべし
▲枇杷 花ハ冬なし 実ハ夏なし
○三株鶴語に 八千八鉢ハ枇杷乃ことなし
▲人乃字 字なし句なし 人ハ非人倫二句也
▲人 人ハ非人倫 ○夫やに 人に君人二句
人ハ君人も人倫なしとなく
▲人に 他乃名二句 ○夫やに 非人倫なし
▲人に 捨人 二句也
▲人乃日 正月七日也 七日を人日となし
一日雞 二日狗 三日猪 四日羊 五日牛 六日馬

○人乃目も高けれ物を格式　宗初
▲人乃香　人乃うつり香し
▲人乃国乃香　返魂香乃設るし
○又立場の附句か　と云句
○攬物もおもむきの体を云　書作
▲人めつくる　人めをつくりを悦ニ云けり
○一云人め悦乃かれハ川と云かくえを語
○激浮世乃にもめも人め悦乃世紀あるらん
▲人め川出　松ニ又句　移ニ二句去
人を移て出るくるくハ移ニ又句
松ニ二句去し　くれ乃とくえても松せし二
あどれ松にて陪す
▲独乃字　人倫ニ一　恋ニ一　月に紀松
あどれ一以上三し　つ月ハ二人倫ニ松ゆハ
▲独ハ一文字ニ二句去　つ又ニ人字ニ句去ごと
▲ひとりうち　ひとりなし
▲ひとしき　一文字ニと句し
▲一ツ乃字　両ニハくし純て一川
とえくハ物し　余乃員字ハ去く

▲一村　居所乃んるく又竹一村
物を数へし　独ツ独ヘ為ど二句て去
あどるべし也と云し
▲一夏　こりつ結ぶあどもれハ只歳
し只一夜にて八只歳こ跳ねど
▲一葉　あどなき乃句あれハ各々の文
乃内し又去べかりぬ
▲一葉　と共も初秋乃ゆるし七
月十又六月とニハ云べかりぬ
▲一葉落　右同断　一葉落ハ桐乃ゆるし　六ニ許す
▲一葉ニ　桐柳付るゆゑ一初秋ニ
桐柳よりも落物物し　古句ニ
○梧桐一葉落　知天下秋
○一葉落ハ風おさ一葉飄初動
▲一葉乃舟　譲し　ま七一葉舟と云ハ質秋が解るし
戯ハ江州ふ山の又おもと　カらさくし
▲一河松　秋かし
▲一衣松
▲夜衣　一文字ニ物と良し
▲一酸酒　ヒトヘサケ　ヒトヨサケ　夜し　六月一日ニとさけアリ

たゝえし 神祇し 年中行事に くわし

▲ひぢかさ雨 笠なくて袖をかざしたる也

▲貴人の房(チャウハウ) 仙術を好く壺中(コチウ)に入

壺中にも日月天地常(ツネ)のごとし されば壺中(コチウ)の天地(テンチ)ハ乾坤(ケンコン)の外(ホカ)と作れり

○人乃世ハさとを離(ナガ)る冗雑なれや

○俗し八夏乃式壺乃中　心敬

▲ひがら乃日　引将(ヒヲリ)乃日し 左右近衛

乃騎射(キシヤ)ハ五月三日ハ左右近乃荒手結(アラテツガヒ)

四日ハ右近乃荒手結(アラテツガヒ) 五日ハ左近乃真手結

真手結(マテツガヒ) 六日ハ右近乃真手結し 随身(ズイシン)

乃騎(カチ)の尻(コリ)を引将くる級ふ引将と云

云し荒手(アラテ)真手(マテ)同じ翁なれ共荒手ハ云

さく肩(カタ)乃様ふて引将しとぞ真手の

日とぞ云ふと引将乃日とハ云し彼教六

日乃真手結乃日をこそある

○我狩袴もさかり我にかゝやしけやまもとの野りせんとく

▲ひとむし　蜉蝣(フユウ)とぞ云り

▲光(ヒカリ)　天象に一 蛍の類 花宮の灯乃光の四出たちに一以上二つし以外

光乃陰又多くこれを可嫌

▲光乃陰　光陰(クハウイン)と云日光月(ヒカリ)乃陰(カゲ)とぞ出り続く 秋昼(ヒル)月日とつゞく間

同気なる夜二句指し 但し 昼ふして秋

秋ふても月ふくも日ふても一ふくなん

ハ為指し 光陰(クハウイン)日月秋昼 背二とぞ

▲干潟(ヒカタ)　四季ハ指二三乃分にするべし

雑説 指に打し

▲干(ヒ)乃字　ひとかすと云て 又干潟(ヒカタ)ハ

雑二あるべし　太指干二任とに

▲ひつじ吹　坤(ヒツジサル)乃風し衣意一番乃

如し風雅天象指べし　四方時に

雑しある二旅とし云こ

▲引乃字　字季し 物ふよる指べし

しかる引かるゝ 二句し

▲引板(ヒタ)　鳴子(ナルコ) 麻鷲(カヽシ)　かど出からこつし

一句に田を結びてハせぬなし。又かに
引板に鳴子両句ともに有て付べし 引
二句 引板と鳴子有りしとも又云
引板鳴子に田を結ぶ秋也 植物二句とも
▲引板鳴子に 麻など付て一句も続く
麻畑を物とすに 船など 一切の名所二句の外へ
一見えて名田中の庵花鶏荘鉄 引なども云ふべし
▲ひやとり 船渡守に 一要の難も云
又遊女仮名也し 斉宮に 静かに籠居とも云
▲ひさち帯 麻帯の外に帯とも
まぎらはしき恋を折るべし
▲ひさくけ 薮侍の様し 並びのあげ
▲ひれ 衣類し ひれなかどもあり
斉に姫のへ乃美ふひれなかれ雅ともあり
▲ひれふりに 袖付ざるべし衣類付てある
しかるずし一句に衣類有りて付れ
ふるとものいはく
▲ひ川ち 秋し 植物し 稲に折べし

○是かに ひつち田 秋し 植物二句
ひ川ちかハ赤 植物しとも
▲藨 先ハ蓬乃るべし 春山
千句中も蓮乃る中ふ在之條し 旅草
かもぶるべし。○字類に 稗 雑木し 又
書言 莫 赤本物生 用 清濁し 字
稗し 見しきく 歩し
とぞへと訓ど 木ハ切株 もも再生し
葉ハ皆綿もり 蒲葦もとると ひこぞへと云し
○見渡ハ山田乃ひつちばえて秋に盛る穂小家ふかけ
▲鄙 ▲鄙乃都 鎌 ミヤコ
先ハ田舎し 三乃名両し
居都乃物なるべし 鄙と共
古都 二乃如し 国府也云とし 一
国乃大也乃下ハ古国乃都し
▲雛 人形乃るし 春れ雛ハ折し
▲ひなしらむ 朝日乃出る山の
めぐりわくなると云 あかきさすもあるこ日 乃あかきと云し
○意近れ旅へ今の立ねらん赤乃山のひなしらむれ
▲開 物繁わく二し ○是かに

たとひらく物ぞに花乃ひらくハ西
持べし花乃ひらくハ霞乃字をも去
▲比良乃海　山颪しと云嫌これを
用ぞとぞ糸急ぎまし　比判し
▲比良乃根おろし　根おろし　風乃名し
▲平野祭　夏し　四月上申日　仁徳天皇し
▲氷室
糸まて用し　山颪こ嫌ど
雪とぞても夏し　雪結ても夏し
〇表秋も様の雅ぞ氷室苑物とひむろ
〇糸結ぞ哉べら旅涼しきれ氷室ハ向ふ款乃ト風
氷室ハ冬乃氷雪（ヒヤウセツ）を納め来て六月
朔日に天子へ奉る例し
▲氷室ニ寒暑涼（サムキアツキスヾシ）　納涼（スヾム）　暑お徒
夜ニ付まふし
▲氷室ニ雪　雨揺し　氷　つらゝ　垂氷（タルヒ）
よすらひハ打し　但し似ぬ旅乃氷ハ
雨り又云氷室乃く　氷魚（ヒヲ）　垂氷（タルヒ）
あまゆぎましく室（ムロ）乃戸しまぎれ打給テ

たべしとうく　〇新結ニ氷室乃名所ハ
守る名聖　松が崎　栗栖野（クルスノ）　岩乃
▲氷室山（ヒムロ）　大堅　長坂山　又丹波ニ氷室山をこや
▲氷室寺　居不ニ嫌ど
▲氷室乃雪　人偏し
▲氷室田　清らしてを夏し
田打おくらハ冬乃物也
▲氷乃糸（ヒミツ）　ますかく氷を冬もぞ雨打田ていふを云
氷室乃頼し　清涼（セイリヤウ）乃糸く
▲氷乃楔（クサビ）　表し　元日し　二郎打梓（クスシ）
春云氷乃厚薄（カウハク）をいく豊年（ホウ）凶年（ケウ）
乃さわしを知節（セチ）ニあし　氷池（ヒイケ）冬と
〇冬氷朝年ハ云氷ニ冬を氷池乃冬打涼ニ冬也
▲氷池祭（ヒイケノマツリ）
流打構ましし　氷池乃冬たるや
氷乃あかね年ハ凶年かり設
▲氷魚（ヒシ）　冬し　右ニ網代ニ祈と注と
▲氷面鏡（ヒモカヾミ）　こゝらの鏡し
〇新清ニ岩まれ乃冬乃氷面鏡ニ付ても去小河ふ付

▲蜩(ヒグラシ) 秋也 只蝉は夏也 乃
夏に鳴ぬとも是も夏也 夏の発句にハ
とりてハ蜩にかぎらず
▲蜩(ヒグラシ)に日暮乃字を当ても可也
▲蜩に蝉(セミ) 嫌ふハ秋也 何れも其へきも
ひぐらしハ秋也
▲蜩に蟬 打越し 秋にハいふべし
蜩日ぐらしといふも一ならず
▲ひやくり 初秋之段也 仲秋乃初
まそてらしかきまいこさし
▲屏風(ビヤウブ) 風乃字に二句去也 風乃字にも
二句去し 此(ハ)居所に孫(?)院 家(カ)にも付べし
殊乃時ハ必(カウ)ど云なし 橋(?)咲乃前ハ
枝鳥羽院屋風乃縁迄ん成べし
▲僕(ヒト) 乃字 人乃僕と 雪(ユキ) 霧(キリ) 雲(クモ) 也 ホと
以上二也 間に二句去し ○異なに
▲僕乃輪(ニヽ) 白詢乃僕 光孫乃傑也 乃
梅のわくれしよいと まやきるそ也

▲彦星(ヒコホシ) 女乃字構也 牽牛 同じ
▲ひえ鳥 秋也 鵯(ヒエドリ)と云
▲久乃字 也 時に依て二も去べし
又久ゝさハ同前し
▲久堅(カタ) 久乃字 方乃字 嫌(?)天
雲居(クモヰ) 中空(ナカゾラ) など 同れも二句去し
▲久堅乃鏡(カヾミ) 非鏡也
▲ひさめ 大雨也 のさめ其ゆかづら とよめり
▲庇(ヒサシ) 不二二句也 本居家也 添ひさしハ居
又句しの異名に 庇と付ふ物也 云々
左に添ひさしに 狩す 庇(ヒサシ)
▲楸(ヒサギ) 初秋也
▲ひさまる ひこれるとも
別に注えるを 蟇(ヒキ)同ハ 晩し
▲蟇(ヒキ) 二
▲姫(ヒメ) 人倫に一 姫人倫(ジンリン)に一 句合
二しと其可也し さ姫 立田姫
ハ姫(ヒメ)人倫に(ニ)し 衣(ヒ)姫 衣通姫(ソトヲリヒメ) さよ
姫ハ句倫人倫也 但し衣通姫ハ和哥乃神 玉津島の神也

○異名ニ旅二　旅旅ハ旅乃こゝろしとき

▲旅松　只松也かめ可嫌し

▲乃め垣　是もかめ可嫌し　併し桂月垣と去し

▲聖　飛込へ嫌ニ

▲菱蔓　去し　植物し

▲日　乃字　字去し　月ニ三句　但し

神無月ある(?)し　月次乃月ニ六二句　年月　名寸月

▲日の字　永日　春日　などハ日次も

一句乃任立申す天象ニ三句し

▲日次の日ハ　暮る日　出日　月雲

日数おし　貴日など　二句嫌べし

▲日ニ　暮る隔く二程去べし

▲日　去く両八句の間ハとりかる

光又去べし　常乃ごとくし

▲日ニ光　二句し

▲日ニ昼　去嫌　月日ニ　秋昼ハ嫌し

▲日ニ　去るなるふ貴日　一日　二日　など

付ても不苦。○異名ニ日ニ一日くと云　同二句嫌と云

▲日影　とありく打続く日ハ影

去引合て二し　日ハ影くと二ハ

如し　月影同断

▲日影乃衣　神祇し去し　植物ニ

蔓乃ごとしとなく　日影乃かづら同断

二句日ニ只句　隔二句し。○奇語ニ

▲日蔭草　おなじ草し

▲日乃出ニ　朝乃株　時分乃株

付句折紙花ニ悪し　入日ニ暮れ日など

▲日乃出　去く月乃出ても迄

▲日乃入ニ　夕時分付句折紙悪し

▲日乃さす　去く月乃さす打続く

去べし　入日　諸る日　移る日　出る

日名一つし　○異名ニ日乃さす巳

去く月乃さすハ如しと云く

▲日乃さす　門さす　戸さす　家

さすハ只句去し

七

▲日乃照（テル） とぢりの友に恥ど
▲日乃あり ふるく月のありも見えぬ
▲日乃ほける に 花などうるは川の文句
　陽朝（タラエ）日も見ゆるなふとみえざる物陽し
▲日乃関 に まなし二句陽し
▲日乃雛（ナヌ） に 時分なる暑 見ゆるにも云
▲日より 三月 於前
○出の残せぬ秋の空乃満ちあたり日にもちぞ　出方
　○法とんと空乃門の月　去人
　○夕ぶ晴日ほどわ殺えし納束　余紙
▲日次乃鷹（タカ） 禁中に猶ら高ど見え
○豪塚ゆら乳嵐とえ人乃景乃雨捨せどり帰し
▲日吉祭 夏し 四月中申日
▲綾日（ヒメモス）（ヒメモス） ふ好詞し 日の字二句（孤弦）
▲火 の字 燧（ヒウチ）火乃記何ふくも定
　灯も此同し 蛍（ホタル）乃とかず火などし
　こハ焼火乃記に同し 瓶（ホタビ）火同など
　又灯にあれ花火乃字わかれハ燧

火乃秋灯火ある先命く出ぢらに水と
見るべし此外蛍瓶（カガリキ）乃あこてし又
おひを火ふ、まくへるハ物こし
▲火二火影火串（ミ）も物し
▲火乃秋に 薪（タキ、ツマキ）乃木樵（コル）嵩二句し
▲火桶（ヲケ） 暮らし
▲火焼（タキ）屋 非祇し
▲響（ヒビキ） 煙（カキ）中も浪中も只てし擣（コヘ）
　嵩（タケ）ね なと二句こし
▲ひうちき 非祇し 非俳とこし
　ひうちけをなり 花なとするとも云
▲紐（ヒモ） 一 夜秋に文句 萩ほどし 下
　紐同じ 下紐（シタヒモ）と共も恋し 依流
▲秘まる 此詞てし 秘密乃んし

○
毛
▲廣（モロコシ）出 ふるくから衣から紅。廣（クレナイモロコシ）
　乃外にあるべし又云 からうしこ中乃衣
　ものせさしらす

▲唐土(モロコシ)　もろこしは国なりへし国の名
小泊瀬(ジジュ)　名所に二句　月なるも同じ
▲唐土乃舟(ウタ)　待と云
▲茂(モロ)乃字モロく　已上三し　鶴(ツル)乃諸声(モロコヱ)
蝶乃諸恋かどれ諸乃字なし
▲諸人　諸共かど同前なし
▲諸共　兆父(ス)偏に変と通ぜず云り
▲もろかづら　変と折越いのぐ
▲もろかづら　葵(アフヒ)乃かつらし　又安見
井出もろかづら　是も婦妹し　又
かつら草と云も葵(アフヒ)乃事なし　葵
葵乃長雨傍(カハリ)など云て竜居(リウキヨ)せし時
これハいつく湊そ諸葛(モロカツラ)是ハ此奴て槃離(カイハナ)れん
▲諸葉(モロバ)乃葛(カツラ)　藍(アイ)し
▲諸恋　さぶの乃恋し　未知る恋か
▲もろき　つし　○斎ぎしに流(モミヂ)乃字なし
よそひし花　紅葉(モミヂ)液小流し
▲もろの字　下　見　灯(トモシビ)乃下と月の下

ハわくし　木乃下　灯乃下ハ同し
又木乃下に小笹(ササ)がもとかどハわくし
○是わに　もとの字　又句去し
山もと　月乃下　かどもし　月乃下　竹
乃下　かどに陽炎(カゲロフ)時　山もと木の
下かどハ陽下二句去し　猿乃が
もと理也乃もとハあすくとなし
見と　わらの浦もとの二句去べし　猿乃
がもと山色信下　往いかどもとなく
▲もとこ　楠(フモト)乃字　猿乃字二句去
もとこ山もとハ西所に猿猴に麓(フモト)も二句
▲もと立　我家乃前也し
▲もと川人　共かと人し　斗人と百　家に云
▲もと外を　もと川人乃ふもとハ地を
非家卿(カミニツカ)は月とかど　西ハ狗乃家かどら故
ふもと乃家もかどしと云なし
▲もと乃香(カ)　もと乃香し　又ハ緑字なし
▲本荒(アラ)乃木萩(ニハギ)　もとあらハかの文字もし

○秋萩乃三夜城壁乃萩ハ花のかげ葉ハ茂しくかげにけず
此哥乃難の云萩ハ一本づゝ出て花ハ咲ど古枝ニ咲と云あり若衣
此萩ハ新ゝ萩とて本萩し萩萩の中ハ悲しく哥ヾら記鶴乃
ハ萩乃城壁乃萩ハ花と云ハ
生く花枝ニ花咲て城壁乃
すく乃本萩と云ハヽ
○萩さらハなおゝの本萩あさ三園ともかごと
青萩仲と云人奥州乃任果てより
のぼる時宮城野萩を越後の道にて
かへさゝ折よりのぼりけれバ人馬乃目これと
ともとゝ人あきらかにひ二条大納言ニ
東ニ至り留ひくのこ所しをりけるとぞ
▲繋結乃糸　述懐し老ニ用し
▲求乃字　只用ゐて二句ニ用し
云ひ乃文一　をしかるに用し

▲求ニ結ひあて付句打越気味無て
二句嫌可嫌し　述懐　愚問賢註ニ三
▲求子　行求乃ことを嫌し不苦し
神祇し人倫ニ嫌ども子ニ打ニ不苦
乃肉乃底し八幡菊気ニられあり
こ文字ニ東往ハ東国乃曲し用駿河舞ニ
▲守月鈎　只一　嫌し　鈎述ニられを用る
▲森　只一　座敷ニ一句去二し　又記
独用し又云乃せらゝす如く云ニ森
と付くよりし只森ニ乳と云無し
▲守乃字　花守関守人倫し　関守を人倫ニ嫌ど
かるる一ツ又田を守るあら人倫ニ
二ゝし守るとて文形ハ字をべし
▲守ハ独用を必く人倫乃人倫を与ふ
もれハ独し人倫しもれハ用し也次人倫ニ
▲うく　と云句　去ニ一只一　又夜なる
あかどのもうく　おもう　もれてかゞく

云嫌て二もなるべし　地打嫌べし
▲最上川（モガミ）　乃がれハ何れも云詞あれ共
上二のがる二句去　宗が付合に必離し
又貞徳ハ最上川乃上乃字濁りて云べし
さて一条禅閣説ハ嫌しとあるべく
▲朦（モコホス）乃字　前と同じく二句
▲もよふ　雪も又衣も又木嫌とんし
▲最中（モナカ）　三句乃も同じ句嫌に去
ハ藻（モ）ふ　長くもあり
○[illegible]
▲もみぢ　同季乃最中に秋の句
▲もよし　雨にもとるし
▲もまし　上句下句に各一づ
▲門（モン）　ハ上二し　いまし句も同おし
▲物　乃字　又句去し　紙二長門嫌し
物（モノ）二句嫌ゆくも中ゆても二句去べし

○又其二物乃字　句付嫌しと
▲物なひ　(モノ)乃字　物乃字
二句去し　襟（モノヲキ）と云　物なふ又
外乃物なひし　物ならぬ又句去
○物なひ類に積合る詞　此句去し
▲物ゆく　大句二段に去べし
▲懶（モノウキ）　慵二　物乃字　其乃字二句嫌
▲物乃碓（ケ）　去し　物二又句　物乃け
さうして其花又句し○又物二
趣して物乃字又句去し　当気（ユキケ）が
どれけに嫌とも先二句一嫌とき
▲物やと　去し　物なひ乃嫌し
なひ二句嫌し
▲物なる乃句　去二けるし二源氏語物
物語乃さこ書く嫌と今又其外乃
草紙二語も取し二去る二又外六
とくハ源氏物語とく俳諧物語と
く乃部去源氏日巻乃百数二一し

ことに文字書の流は当流の旨也
を一折の内に又なくも不苦と也

▲他の名どころ　昔物の名しらへは嫌故
又常体どもの曲りの羽音は嫌今は
不嫌　羽の字とくるはこれ嫌也と
の部し　是も不嫌　但し下知の詞
あらばこれを嫌べし

▲武士　人倫也　哉は数の八十余語
川とかくも人倫也　物の字に不嫌

▲武士に海士猟士不嫌　武の一字
とも嫌ふべし

▲母屋　おもやは家の名也　寝中を云　裏屋
と書は妻に成る家也
又方へ打の部なる家也

▲もと　二種なるべし　もとはいやもとの
もとふよりもとそ打なとの拍く行
なとれんのもとは嫌なる嫌まじき

▲日次　拍く様如紀本し

○柿栗くるみ紀木に御肴は前後を嫌とてある

▲紅葉　一　梅桜の句は一巻に乃紅葉一
紅葉かつの橘は此外なとつきの部武の
詞し　紅葉かと云詞多し　何季も打べし

▲紅葉に　葉の字色の字二句隔て葉は
竹の葉夏の葉也　色は青松木の部く

▲紅葉に　山の色散れる色　草の色木
蔭を隔り　○更に　紅葉に錦二句
錦は色なき故　山の錦は打隔べし
又同云　紅葉に色葉色二句隔く云々

▲紅葉に　木の葉落葉は不嫌也
色くは打隔し

▲紅葉に　楓打隔し

▲紅葉かつる　同じ端又は名に海らし或は
川の紅葉なども散し　川岸もあらく
萩なども背秋しく観隔し　柊は冬也
二葉の紅葉は夏し　○　添本へ也
萩や林の村隔　以句　ことれんなる秋し

○実かし　只紅葉散は冬なし　但散も
色を結び霧を結ぶは秋也　同又云
紅葉散く梢を操る冬也　下葉を
むかも冬也とそ

▲紅葉乃段　紅葉乃堀　なとくしても
散らしく去る字を冬也　故秋也　木乃下ふ洗ゐる
おかみるかへるくみ散く云字をきる放ゆかし
まなら・さくかりくあもむも散乃字さみ秋也

▲紅葉を嫌
○実かし二　紅葉嫌　植物こ　折越隠し
紅葉嫌　木葉嫌（コノハ）なども　季

▲紅葉を掛衣ふ植物こ　二句隠く云く

▲紅葉ぬ　りこなし　ねむし　終ふりと
おぬとのつかりこちせぬし

▲紅葉乃橋　天象し　移らし　植物二
桃など　○実かし二　紅葉乃橋は七夕乃
通ひ天乃川の橋を云　天象ニ二句隠
又紅葉乃散掛りる山家乃橋を
も云　其時は植物乃紅葉なし　冬也とし
散積る紅葉乃橋は埋れて跡絶果る秋の古里

此句ハ七夕乃まいわらず

▲紅葉乃莚　植物し　移らし　紅葉の
散しきたるなし　縮莚（イムシロ）は人乃寝る物
なれバ非人なと衣こ見ゆく　苔莚（コケムシロ）秋ぶらぬ
差別ますべし

▲文字　二　菓子　二句隔べし　○実かこ第式

▲文字鎖（グサリ）の句　二句隔し
書籍乃文字あまりハ不用しとき
星ハあれて　唐ふ紐ぐ　夕く
相もハ生く　なども　幾度（イクタビ）も為らず

▲百　乃字　用し　移し　千乃字ニも移し
○百乃と三つを移ふ去乃数　此句九十の移し
去こふず　只句もきこ重し

▲百舌鳥
○実かし六　百舌鳥と斗も書し　百鵯　廿ツ
乃鳥と記書し　百舌鳥と同事し　百
舌鳥先まなし　只女き鳥し　百鳥
ハ妻ふ比など　とかり心猿しとそく

▲百千鳥　毒し　鶯ニ移　種さ去の鳥
ふも鵯し　百千鳥云く　百千乃鳥を云へりとそ

▲百敷(モヽシキ)ニ　此大宮　九重　雲の上　座
皆打越　雲乃字　両し　懸詞又打越ト云　統之
▲百歳ニ　神祇乃文字付べからず　二句も
歳乃字きらふまじ　〇是ハ二百
歳ニ神祇乃文字程乃心　夜吟乃付
▲百夜乃庭ニ　流付るのみ　句ニ是ニ　秋ニ云
▲桃(モヽ)乃酒　嫌し　植物し
▲藻(モ)　又一句く植物きらふ也　又一句隔
〇是ハ藻ハ水植物し句も通ふ神祇
▲藻ニ　萍　打越の例しをうるなき
両植ニ云　附字を備ふべし
▲藻刈(モカル)　雑し
▲藻屑(モクヅ)　句去二此ハ　植物ニあらず
藻屑く藻屑くし　打越屑　百敷ニ
て　此説　〇是ハ藻屑も同境め句附
植物ニ此ハ句去ニ障ると嫌之
▲藻屑火　此句去二　秋分ニ此ハ
▲藻乃花　夏し
▲藻塩(モシホ)　句く浮藻(ウキモ)なるべし

▲藻塩火(モシホビ)　藻塩乃内し　皆焼(ヤク)塩の内し
▲藻塩草　此植物ニ嫌ニ乃内なるべし
又云植物ニ二句許嫌べし　打越　藻(モ)
一の外と考し　〇是ハ藻塩草(モシホクサ)植物
二句嫌し　焼乃文字のみ　ふかしつく植物
▲藻(モ)ニ住虫(スムムシ)　雑し　貝子(コベ)看経て秋し
〇其注ニ　扇を秋ニくと思ふのあまれ藻
と刈ニ丸付のく　おほれくとらるく　旅ニ
まれかしく　なし
〇人を恨ニる多わまれ刈りニ住虫在と云れつく
〇思ひつゝしと何を歌之ん
〇世をそふ藻ニ住虫なれ　糸祇
▲百舌(モズ)　てし　庭百舌　両の字二句て嫌
▲鵙(モズ)　秋し　聖をむし　鵙乃草茎(カヤクキ)も秋し
生類し　植物し　家乃ニ夜し　雑也
冬し　草茎(カヤクキ)　大方ニ秋し　又嫌句秋ニ
〇其注ニ　鵙乃草茎因縁ふしむずなく
讀之ハ草くさハ蟷螂(カイル)やう乃歌をさき乃

葉をさして時雨の雲もえにくくとかや
めづらしき事ハ鶺鴒の尾の色をさしく
又鳥ハとまりて水にありてわたくしに見せて
鶺鴒も時を知るとぞいはれし鶺鴒ゆへ
てもぞる処ハとまるとぞわかれど是を
どちらかれもへだてる一日をかし　八雲御抄に鶺鴒の秋の聞えし
○まがれハ鶺鴒若菜にぞきぬハやらん我がわらせ
鶺鴒に鶺鴒の源氏にかくれて鳴ぬ鶺鴒の茅草
○こゝろして升鶺鴒の草くき
○時雨る鶺鴒し山ホ木かくれく　宗俳

▲鶺鴒の尾や見へ　時雨れ雲も乃かゝりけり
草むらにさして居るとも見へとし　ふれてやまし

▲せきとめ　縮し　せきとめ二大名　木積し

▲りうだ　むもだ大名　菰楫し

▲西瀬(セイ)　唐の名なし　友　桃　道　柳
歩より屋形しし　蕗　把　西瀬法　西

（一）世

▲施(ミニ)　浅(タンワウ)瀬　濃(ヒヤウ)　抹(ヘツ)　雨(フタツカラ)　ね　宜(ヨロシ)
雨瀬乃夜乃綺し　去ハ瓦乃西瀬絶
魚乃けしきも美人乃西施ホさゝくへハ
夜乃像時の西施の紅粧しるとさゝろ
又夜乃嘯る時ハ西施が素顔乃露を
見るがごとく山もみてを夜積らに
西中しと地気をわめ至る倚し
○日の西乃瀬声く夜されて　宗俳
○舟乃入江ホ梅の香をかし　云白に

▲せがれ　所せく西くへし

▲せいもん　小気し　鵠(ハクノヒラ)　廣　鵠(ハクノモウ)　徒　日本紀

▲迫門(セト)　戸に又白門に西し　迫門ハ
海門(ウミカト)乃屋合し　瀬戸(セト)なとし　又は
満ゆて汐乃屋合逢坂し　美女
戸も西積もしも

▲迫門　急く門渡(トナミ)すまし　至り世界に
はせられ渡しとる

▲せうふ　大切ホ将ゆゑし

▲芹（セリ）　て　なつかし　香し　○異本ニ云
なつかしとして又娃言より　なつかしさ手帖　さもしく云
▲芹摘（セリツミ）　恋とるとも云し　袖ぬらし
▲せりの清水　山城大原乃村ニあり
○大原やせりの清水のむかしおもひやる之まし涼とそしる
▲せか　文（フミ）を云　せこと云　人偏し
▲せこ　男を云し　太郎冠者とも云
▲せこ縄　猪ニ縄をつけて麻（アサ）を追出すとく
▲せんさして　碁（ゴ）の事也し
▲せんとうべからず　せんかうニかれし
▲仙家乃森　蝶花乃事也し
▲せん　せり　せし　云う　すく　成就の
名皆二句去し　月をかけめなさる
ふりとらぬうへとなせしめぐに雨滝
▲関（七十六）　只一　在家ニ一　文恋の表秋　光陰を
　第五に雨して一切之二し　何事も打し
　なせく山卯し
▲関こ　なせく打し　井関も関乃字之
せく云河只一ニなくし　○異本ニ滝の
字又なせくなく関ニ西海と
▲関（作）居　関乃戸　縁なれハ西生ニ所ニ
あるし　守（モリ）越（コエ）とともいれハ縁し
▲関居　関乃戸　在家ニ二句柳目乃
卯し　所生も二句乃物ハ森目の卯し
▲関過（スギ）り関近（チカ）　旅をよりたる小西方
乃異をおりとりと
▲関近り関近こ　遠坂街なる中縫ひニ
ゆくいゆく庵（モロコシ）ニより都とその家ハ之
遠坂の山の頂なからざれ之是ハ遠坂し
○異なこ異なるなと和坂関所あこ云く
▲関乃板館（ヒサシ）　在家ニ二句
▲関る　縁こ哦と候て句縫ひ継へ一
▲関乃島　錦（ニシキ）し　秋なし　在家乃なるニ之ある
▲関山　只関乃まこ山し
▲関川　和坂乃異川し　免本乃家介
ふあり
▲関入　異こ入し
せ

▲関乃清水　秋隣し　きり山乃ちか道を　右顧に出て九乃
▲石燕（セキエン）　石也燕川乃燕と似く（ワヅメ）　雷雨の時は飛　されど燕行乃晴れいつへ
りく乃石なりといへり
○これが燕（ツバメ）乃一つれ乃石
○石どもに泉（レンジ）も深く常在ふ　家持
▲せめて　三五間　二程有へし
▲せめてさへ　せめてさらいし
▲瀬乃字　只一　名水に一吹い石し
瀬瀬（ハツセ）　名を瀬　雨降し又云ふる瀬（メカセ）鵜（オコ）
と舟乃流めく只乃瀬の有るべし
もう瀬をさすし云ふかれいし又ある
べきなりし　鵜（スカセツキ）　又云ふべし秋し
▲瀬見（セミ）乃小川　鴨（カモ）川乃事也　川流にて
瀬乃あゆかし云乃有し
●石川や瀬見乃小川乃清けれい月も流れを尋ねてそ住む　長明
▲蝉一　夜し　日暮（クレ）し　秋し
蝉も鳴かも名別かれた　秋せんと猿鳴せうふかくし

▲蝉（セミ）　二　日暮し　鵆がく秋し　蜩し
▲蝉　ゆくく　空蝉（ウツセミ）乃世たかし
▲蝉乃り乃羽　あまさ鳴きくし
▲蝉乃声ぐれ　修羅二　夜しも無縫
時雨二乃内小く秋乃洞夜と候べし
▲蝉乃稚夜　夜寂しうすさ寂し
○蝉乃鳴秋乃夜はおすきれと織りのな流も白（ニラ）ぬ（ニモ）弥
へ　せくられ羽と又月小童紀役哉　家持
▲蝉乃羽衣（セミナキ）　蝉乃羽乳纖をへ云也
▲せくら紀　流ちゑ　ゆふくもく流て飛

（　）
す

▲遂（スイ）垣（カイ）　スイカイ　スイカキ　垣二画し
▲瑞祢祭　雑し　年中二七十余度まり有り
▲皇（スヘラギ）　ゆく大君を称し　時小秋（スヘラキ）
きう〳〵と以て（ホウ）も多みして（ミナリ）称し皇乃位
せあいかく多き縁乃洞小飛たかい也
い日宜し又縁乃洞小飛ひかく事小

浮世乃初と付る事同意し くもかくも
▲末 乃字 大句まし上まく 所なし
▲末 二 指 二句し 引歌も二句し
▲末 二 繩墨(スミナハ) 二句 繩墨ハ非三山類二
▲末摘花 夜し 秋花し 源氏まきいまき乃名し
▲末乃松山 非植物し 山類し名所也
小松など末乃松と付もまるし
〇前後二 旅同前枕二 松乃松 中の
松 末乃松ごとく 三里ほどありし
▲まどかし まどかき 立二句し 〇まどかに
無限し 也んなき別花あし まどかに雑を也ん
乃まどかし 〇方まに めぐりまどかならき 間なりし
▲あるまを廉小有まと濱の浦松原とかやうし 納かなし
名きまどかきやう乃 なきこと云んし 無縁
▲菅(スゲ)(スゲカサ) 云句 物乃かりくもし
▲駿河(スルカ)海 なご只図乃名二句し 名所
乃方なかるる名寄小名所二三句雑ぺし
駿河乃海 伊勢乃海 筥る同前

▲姿(スカタ) 二 似二句計り姿附(スカタツケ)にも可然
▲菅(スゲ) 一 まくく 菅笠(スゲカサ)乃 菅蓑(スガミノ)九
内 二 以上三句之し 菅ハ春 色二 非(ヒ)二
植物し 菅乃笠蓑(カサミノ) 非二植物二
菅原や伏見 非二植物二 一切 名所
▲まとう 菅(スゲ)乃根し
▲まとび鳥 雑まし
▲まろぐ 糸をまろぐるし
〇秋乃夜まろぐ糸とも無(ナ)けの七夕乃夜や可然
▲まろぬく 志げきるし
▲まどひ 麻乃事を隠し題めしく
まとひて初くハ也ねし 又云鳴るまどひ 秘抄の前後二
小糸まどひと云羽ふ雑
男(ヲ)麻(ア)をまとひると云 女(メ)麻をもとくりと云
〇まとひ鳴秋乃萩とも続引ん人也川かり萌ん
〇秋乃名小なやまくなる秋萩はふまとり帰し
▲又まとひと云り物ハ手先にゆくれ花つ
草乃色も多小散乃本(テ)あるとなる

と云文人をも引などめく 幣(ミテグラモト)に取付など
ものゝく云又里山に野乃物ふどしけると
に用わるとも云もてはやすと云是ハ煤(スヽ)払(ハキ)し
○根乃名などの氷の春風に打とけて鳴鶯
の露もどる庭の玉笹に飛さ一村のなを冬あれや
▲簾(スダレ) つし 居ふ乃用し 此外されなく
て部りしらめてふる文一名をべし 此外
りゝハ之れ称し 撥流 竹簾(ス)と云くれ
かゝく 車乃簾(スダレ)と 雷郷せられし
●其外ニ 簾一色く 並されし 御簾(ミス)なを 雲(ニワ)
りおしられとめくいなかのさとく し 壁
簾(ス)乃下(モト)ものどされ一乃ちらし 卜を
▲簾(ス)乃ゝ人 宮乃ごとくもどされ乃あし
▲簾(ス)ごし 月もどされてし
▲すゞく え 集(アツマ)二句し 多其外に云 集んし
▲硯(スヾリ) 衣紙ニ一 硯(スヾリ)箱 文、山乃きも
硯田(カン)ものに 一名二てし
▲硯(スヾリ)箱 飛ふ本ニ 未二句 筆(フデ)二句 流

▲すゞく玉田 おゝくもどてし 雪ふし
○奇雑に 硯(スヾリ)廻(ガリ)しく文 硯乃めぐりの事あり
清くすゝの乃もどされ田井ゝく也
▲硯(スヽル)乃水 只ハ文句ましし 携て 世を携
ある句も携るなどされ携へ氷 杯なし
▲携る 地、 素門(スヽテヒリ) 杯 堤 文もどかり もどさいがの二句し
▲すゞかとわ 漢くし
▲すゞかり し云句 逢ふ野ゝく二てし し云句し
▲すゞう し云句 住(スミ)乃字し さへく云詞
栄かし云詞しく云流 ふ奇用し
○衣もゝも雅乃ゝふ入ぬし 袖らや来れやゝまくれん
○雅の波の入江めぐれる鴨(カモ)ともおなれに禁おくふ
▲すゞん 乃家 またのもとゝん 蓑もどん
又どれもどんハ之ふ付こゝりし 而れ付ぞ
之字のふニ 飛ぶ只らんと云 并し
▲すゞん節(フシ)二 すゞし 節(フシ)二し
もゝしこもゝん 句添し
▲すゞるこ どりもどれば 付句もふ經

と云又人を引とゞめく袖袂(ミテクスモト)に名付と
もぢりて云又野山にも物がたりとも云へ
に取合るもまた云是は末摘(スヱツム)花にし
○様々の花とりの春の風に打ちぎりて鳴鶯
○家とざる庭の玉笹に飛さ一村又夜々走れ
▲簾(スダレ) 一し 屏風乃用にし 此外 されば
て抑 とめてとりて又一かくべし 此外
かゝはこれかし 撥流 翁(コ)簾(ス)とくれ
新く車乃簾(スダレ)と 当絹也それをし
・又かこ 簾一色く あされ 翁(コ)簾(ス)など
かがしられとめくハあるべきとくし 空(ニカ)
簾(ス)乃下(モト)もまたぶられ一乃うちし(ト)云
▲簾(ス)乃外 花乃ごとくもたれ乃あし
▲簾(ス)どし 月もたぶれいてし
▲すゞく てし 集(アツマ)る二句し 皆其に去 然んし
▲摺(スリ) 衣新こ 摺(スリ)ノ盆又、当乃もを
摺(スリ)田(カタ) 衣もじ 一かく二てし
▲摺盆(スリノ) 飛出(スキ)来二句 手箒(ツキ)二句流

▲すゞく王田 あつくもとて 蟹かし
○奇特こ 摺廻(スリゴリ)し又 摺乃めぐり声り
清くまで乃もとまでれ田井とく
▲摺鉢(スリバチ)乃家 芸の文句あし 摂て 也 花
あり也を摺るあぢく 摺く 杵 摩し
▲摺乃世、 素門(スデドリ) 杵 摺 又もちる二句し
▲すゞかうわ 濃くし
▲すずめり と云句 遠に新く二てし と云廻
▲すゞり と云句 程(ナラ)乃字もしさへく云洞
笑ふもと云洞しと云流 亦行 用し
○秋もとも秋乃花に入ねし 秋らや春花や　まきかん
○渋(カル)井浪の入江めぐれる鵜(カモ)とくもおもれこそ綾稀なに
▲すゞらん 乃家 まのすゞらん 業すゞん
ありされすゞらんハ又に付こもりじあれ仕ん
云字のかに飛ぎく兵らんと云外し
▲すゞらん前り二 すゞし 前り二し
すゞしこすゞらん 面影し
▲すゞるこ とりとれバ 付句もふ也

▲すみ あらく よまれ せん あと二句とぞ

▲澄(スム) 乃字 夫木二一 あかさに一 以上
二テし澄(スム)月ニて 月ふかと澄ぬとも かなし

▲すゞ 乃字 又句あるし ようるハ二句し

▲勝(スグ)る と 堪る 二句し

▲すくより すくやうた 縺の字し
剪(コウ)鍵(ケン)と續く字し いかへいさきこあき 去のさし

▲すく世 世ニ 元年ハて播り

▲すくせ 身乃戒行乃事ありてハ寺
ニおくさう連し 宿(スクセ)縁とまとこと
●又かこ 宿(スクセ)世し 寺しくさ、宿世
宿縁乃夜掻 旧炎婦炎分きへし

▲こともなり わくし

▲ねて様(サヒ) 秋し 七月廿六日又廿八日とあり
ことわりのめ ねさくてよろしきなるし
○かゝる ね様(コケラ)乃あし いふ乃 捶(スギ)ち乃あくぬたり

▲須(ス)干(ヽ) 湖石 草ゝ 青き穂し 同哭
山里 とまれ上野 伝れも 此の所さ

▲須戸乃沐猴(ミツギ) 春し 三月上巳 源氏にも 見てさくれしとある 若し須かさ

▲すげなし 去人(スゲナシ)としき去 らし

▲すこし と云ニ おいさきニ 二句程

▲すくなき ニ 去二句程 少(スクナシ) 鮮(日)の字之

▲すさふ 夜風乃ゐこ一 文あぐさとの
わ乃すさぶハ 打靡て又あるべし
○すさめられての月社すさまさ と云句
打捨られてと云んし 上手乃句ゝく
仕来るし ○新語ニ すさぶハ変きたるん
しかてあそぶし 手すさび 筆すさび
口すさびし 又人もすさめども 輪もすさ
めずられ ふ花(セ)重んし すさめられくとられ
捨らるくし 積(カ)りてんし 風すさぶハ吹
るし夜すさぶハ降(フル)るし 降(フリ)すさぶといへバ
と又バ吹やむるし 又 吹すさぶ
降やむるし 去程のやうふんくと合て 志の事り

▲すさぶ 荒(アラ)乃字し 風乃すさぶぶ(スサブ)ニテ
夜乃すさふ 清かし すさぶハ季さる

かゝれたよく雪ちるかゞ河るあどく云
ちるらぶハ其乃字乃かゝれバ雪ちるとも云
おしくちるらむ小雪ちるらし　此其乃二つべし
▲ちらさびと云ハ物小依て遣べし
風ちらさぶ小葉乃ちらさびハ雨遣し
琴とちらさびあどれまちらさびの流し
葉乃ちらさびふ打遣し
▲ちらさめぬ　ふゐぬし　ふ雪し　太とも続と
▲洲崎ニ　美砂(ニサゴ)打し○云仍ハ爾とも云し
▲洲崎ハ　多島の稀し　洲ニ巌(イハ)石(イシ)ハ爾し
▲洲　乃字　只と居所とこゝ二ニし
美砂打し　爾と云流急し　巌(イハ)石(イシ)ハ
爾し　岩石ニ美砂(ニサゴ)も爾し又云白洲(シラス)
只ハ多島し居所結くハ州(ス)ニ多島ニ
○其外ニ洲ニ鳴目系し　洲ハ鳴と洲(ス)
▲杦　一　ふ乃杦一州上ニし。
○其外ニ此外ニハ　杦窓(マド)なるしと云く
▲杦乃庵　杦乃門　杦乃窓　巣(ス)植物ニ

假し　松杉乃門　窓ハ植物し
▲隅田(スミダ)　此詞少あれバとき假し
すみ田とハ可なし
▲ちらさと　残多し　ちさらぬくこゝまざ此うり
▲多く　と　当ら句打遣し只ハ又句表(ヘ)
▲住　乃字　居所ニ打越可遣○其外ニ
▲住乃字　又句去し　澄(スム)二一切ふ遣さと
▲住ニ　すまむ二句　住(ススム)乃字し
▲住　七井所とさしで云がらし　松り
住やりめ住　秋すむ方あどられなし
▲住吉乃神(カキ)　居所し多島し　住吉の
神垣も神乃字ニ引遣さく多島し
是又只住吉と外ハ多島ニ此ざと
○其外ニ住吉乃松同是社あどゝしても
多島ニ此ざと　とこゝし
▲住吉ニ　住乃字二句　吉乃字又句遣
墨吉も書故し
▲住吉乃市　秋乃季なる故歌なる

べからずされバ壬午年ハ秋ならぬ事に極候
先例のごとく秋なるべきなり。○又花に
秋しも九月十三夜しと立ての秋なし
たからの市丈なと〳〵

▲栖(スミカ) 居所ニ二句 住ニ二句 家の字に
二句 十句の内なるべし

▲棲(スム) 住ニモ 居所ニモ 二句 居の字又句
嫌と云説あり 当時 居と二句嫌て可也

▲墨(スミ) 一 ある墨染(スミゾメ)などいふこと有りけ也
すみや乃新式乃外のうれ時により
能れ不似く宗匠乃分別ニ一句嫌なし

▲墨 あまく 黛(ミユスミ)ハ又なし 又或説

▲墨染乃袖ニ 世捨人 桑門 付るなる
しかもす隠れ家ハ悪し ○又花に
墨乃衣 墨染乃袖 能ニ尺(ス)教ニ述懐しと

▲墨染乃袖 苔衣(ゴケ) 苔衣などハ 折り
べく可な也 花可弱 背述懐し

▲墨染乃鬼 文程なこのかるき句し

▲炭(スミ) 炭焼(スミヤク) 炭竈(スミカマ) 皆山類乃用し

▲炭爈(スミヤキ) 人倫し 能ニ山(ス)類ニ 炭売(スミウリ)同お

▲炭竈(スミカマ) てし 其外 居所ニも要し
八句乃内いらず

▲炭竈(スミカマ) ある塩竈(シホカマ) 要し 但し居所ニハ去り 嫌説

▲すだれ 簀(ス) 要し 菫(スミレ)乃字なし

▲すご 濁(ニゴリ)乃字なし 弁など吹ざる
とこなし 清く読べし 深しなどふてハ
弁ぜんじ読ともよし

▲硯(スリ)乃海 硯乃海 筆乃海 ホ 能(ス)乃意ニ

▲薄(スヽキ) 只一 尾花(ハナ)一 すゝき乃穂屋(ホヤ) 能
などれ乃ニ一ゝ去るし 薄ニ尾花ハ
○又花ニ すゝき乃穂屋ハ 焼原よりまるでなり

▲薄乃袖 去るし

▲すゝと 志れ 又句 すゝと竹 三句
すゝと笹(サ)面し 笹志れ是を嫌を
○又花ニハ すゝ志れ面 志れさへ
竹と又句よとく

▲すゞむ　物静なく二てし　といすゞむ
などゝなく　徒にすゞむなどは可いる也
又なにこ　閑すゞむに盃(サカヅキ)を勧(スヾ)めてなどゝも
▲すゞろ　てし　すゞろ共云　〇又なにこ
不遇(ツロ)と書しは　二句去る也
ふ猶しよまく
▲冷(スサ)まじ　てし　おそろしきにも
てもる秋し　鶯(ヨシ)鴨(カモ)鶏(ニハトリ)に結ても秋し
▲涼しき　夜二　秋一　以上二し　秋の
字一夕(ヒトヨ)の字入ぐれ秋し　月の涼し
さ夜涼しきとてれ夜し
▲涼しさ二　冷(スサ)し　寒(ヒエ)の　男かむ　ゆや
やる腹(アタヽ)の　如武様二句し　蕣　照日
夜るかしなどの句こ　寒気(サムキ)暑気(アツキ)乃心あら
ば可嫌し　多くは無若の　清水を待ぶ
泉(イツミ)第は二句し
▲涼しさこ　夜るかし　折し　秋乃
涼しきまれ面ろかぬかならず又云秋

乃涼しきに神房と付ぐる句数云たき
ぐ　〇又なにこ　涼しきこ　夜ゑかしは
同雨にもらしうずとまく　精霊(アリ)夜流ニ
▲涼しき夜　極楽乃すにてれ比翼(ス)夜
▲すゞむし　待須乃るし
▲鱸(スヾキ)　てし　〇又なにこ　秋し
▲すゞ子ゞす　鷹(タカ)　嘉し　同(オトヽ)なべし嘉
し嘉は鱸乃鳥こ鳥囃く鹿にかゝ
▲篠竹(スヾタケ)　ゐ　稲に篠乃足に物をさすし
讃し　〇俳諧に　無に篠を
立るすし　涼じと書へ讃き諸し
附あ飛より無にあれなれども　無に
篠を立るれあるし　然して公卿殿上
人乃為らく無まれ篠を立るしとる
〇篠竹と書る時は楽をさて立夜の上のに雑子立し
▲篠懸(スヾカケ)　篠　本首を木山伏にあらず
哭は山伏し
▲篠麻こ　麻乃字用し　又俳諧に

雀廂をよくろとあるよし　右にもある小録す
▲雀色時　夕暮乃名也　其頃に
二句夕時分に二句　名に又句　時に
打雀一乃如し　但し　あわりかぐ　これかこさし
▲よくられて　よくけるし
▲巣　つし　名乃巣　同古巣　雪の
巣皆春也　名名乃巣ハ夏し
時鳥乃巣も夏し　燕ハ秋し
鶉乃巣　鳴乃巣ハ雑也
▲巣を去燕　句に　初テ社日に雑　去
社日ハ秋し　燕ハ社日を初く巣を去
▲ほと　漏るかな二句去し

元禄十一戊寅年六月吉日
浪華書林
隅谷源右衛門
柏原清右衛門
鳥飼市兵衛

林氏醫院